

三宅雄一氏・東鳥取小学校
・東鳥取公民館寄贈瓦報告書

2 0 0 7
阪南市教育委員会

はしがき

三宅雄一氏は1901年に生まれ、戦前より古瓦等の収集をされていました。そのコレクションを1992年、貝塚市在住で摂河泉文庫の南川孝司氏のご尽力により、本市に寄贈していただけたこととなりました。

藤沢一夫先生の『摂河泉出土古瓦の研究』（1941年発行）には、今回寄贈を受けた瓦の内、坂本寺跡、春木庵寺をはじめ、秦庵寺などの瓦が三宅氏の所蔵として、掲載されています。これらの瓦が採取された寺院は、発掘調査などの詳細な調査が行われないまま、開発事業等が実施され、その実態が明らかになっていないものもあります。このため、このような収集された瓦が非常に貴重になっています。

今回、堺市教育委員会の近藤康司氏により、寄贈された瓦の所見をいただけることになり、また、近畿大学教授 大脇潔氏、枚方市教育委員会 竹原伸仁氏に考察を頂き、本書発行の運びとなりました。

本来は、寄贈された時点ですみやかに本報告を発行すべきではありましたか、諸般の事情により、14年後となってしまいました。この間、三宅さん自身がご他界され、この点につきましても、本市の不徳の致すところであります。

末筆ではありますが、ご尽力をたまわりました上記の方々にはこの場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

阪南市教育委員会

例　　言

1. 本書は阪南市教育委員会が三宅雄一氏（本市下出在住、故人）及び、公共団体から寄贈を受けた屋瓦の報告書である。
2. 三宅雄一氏よりの寄贈に際しては、摂河泉文庫の南川孝一氏のご尽力をたまわった。
3. 本報告に関しては個々の瓦の解説を堺市教育委員会 近藤康司氏、考察を近畿大学教授 大脇 潔氏、枚方市教育委員会 竹原伸仁氏より玉稿をたまわった。
4. 各執筆者の文章表記などについてはあえて統一を行わなかった。
5. 本文番号と図版、写真番号は同一番号とした。
6. 法量の単位は別に記載したものを除き「cm」である。
7. 解説に掲載された実測図の縮尺は全て1/3である。
8. 本報告を行うにあたり、岩戸晶子、上村和直、加藤俊吾、高井暁の各氏には、色々とご教示をたまわった。記して感謝します。
9. 本書の編集は阪南市教育委員会生涯学習推進課三好義三、田中早苗が担当し、資料紹介の製図等は井上祥子、和田旬世、井上進、島田万帆の協力を得た。
10. 解説中の遺跡所在の市町村名については大阪府下のものについては「大阪府」を省略している。
11. 解説中の軒瓦の型式名は、近藤康司「和泉における古代寺院の成立と展開」『摂河泉古代寺院論纂』第1集 1997による。
12. 最後になりましたが屋瓦の寄贈者、または寄贈にご尽力をたまわりました各位、各団体。玉稿をたまわりました各先生におかれましてはここに記して感謝の意を表する。

目　　次

三宅雄一氏寄贈瓦

第1章 はじめに	近藤康司	2
第2章 資料の紹介	タ	3
第3章 まとめにかえて	タ	24

東鳥取小学校寄贈瓦・東鳥取公民館寄贈瓦

第1章 はじめに	田中早苗	26
第2章 東鳥取小学校寄贈瓦	近藤康司	27
第3章 東鳥取公民館寄贈瓦	タ	29
第4章 まとめにかえて	田中早苗	38

考察

三宅コレクション九頭神庵寺出土軒先瓦について 竹原伸仁	40
「一瓦一會」瓦当側面接合技法-SR技法-の軒丸瓦について 大脇 潔	43

三宅雄一氏寄贈瓦

第1章 はじめに

今回紹介する資料は、阪南市に在住されていた故・三宅雄一氏所蔵の瓦コレクションである。三宅氏は堺旧市内の郵便局に勤められており、瓦は局に保管されていたという。ところが、第二次世界大戦の1945(昭和20)年7月19日夜半から20日にかけての堺大空襲により資料は被災し、赤変している。本来は資料採取地点の記載があったとおもわれるが、消滅した可能性が高い。なお、かつて摂河泉地域史研究会の会誌『摂河泉』第19号に筆者を含む摂河泉古代寺院研究会が当資料の一部を紹介した際に、採集地点を記しているが、これはあくまで同紋様の瓦の出土遺跡から推定したものであることをこの場を借りて明記しておきたい。

【参考文献】

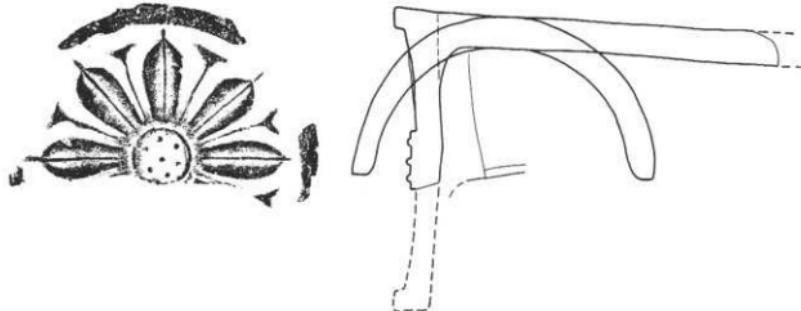
摂河泉古代寺院研究会「三宅雄一氏所蔵古瓦の調査」『摂河泉』第19号 摂河泉文庫 1992年

第2章 資料の紹介

1 八葉素弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当上半部が残存する。弁央が窪み中央に突線が走る。各弁は離れ、間弁はT字形で中房まで達する。中房は突出し蓮子を1+6に配する。丸瓦は瓦当裏面上端付近に取り付ける。周縁は素紋で、低く直立する。瓦当裏面は横方向のナデ。枚方市・九頭神廢寺で同范のものが出土している。白鳳時代に属する。

1	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長	
		中房径	内区径	弁長					
		19.2	3.7	16.2	6.2	1.5	0.9	1.6	24.3



2 八葉单弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当面内区左半部4分の1が残存する。弁の輪郭は突線で囲まれ、子葉を配する弁は接し、先端は尖る。間弁は楔形を呈する。中房は突出し、蓮子は1+8で、一つずつ范に粘土を詰めている。瓦当裏面は不定方向のナデ。丸瓦は凸面側を斜めに削り、瓦当裏面に溝を彫って接合する。泉南市・海会寺I B型式と同范。白鳳時代に属する。

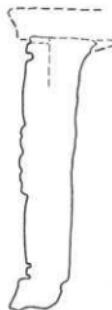
2	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長	
		中房径	内区径(復元)	弁長					
		18.6	3.8	14.2	4.8	—	—	2.3	4.2



3 八葉単弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当周縁上半が消失する。弁は素弁で肉厚。弁端が反転し、輪郭は突線で表現し、隣の弁とは中程で接する。間弁は中房まで達しない。形状は楔形。中房は突出し輪郭は圓線が廻る。蓮子を $1+6$ に配し、中心の蓮子と周りの進子間に范傷が2ヶ所ある。内区と周縁との境には太い圓線が廻る。周縁は素紋の斜線。瓦当裏面は中心部が横方向にナデ、下半は段がつく程周縁に沿った強いナデを行う。丸瓦は先端部がそのまま周縁上半となる。范からはずした後に周縁と圓線との間に工具を使用したナデを行う。和泉市・池田寺跡で同范品が出土している。池田寺I B b型式。白鳳時代に属する。

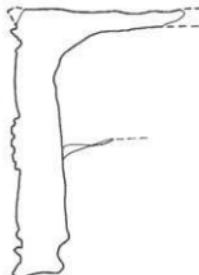
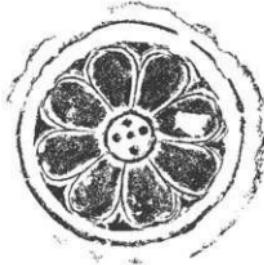
3	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	18.4	3.8	13.6	4.3	2.4	1.0	2.9	5.0



4 八葉単弁蓮華紋軒丸瓦

3と同じく池田寺I式軒丸瓦。弁は素弁で肉厚。弁端は反転し、輪郭は突線で表現し、隣の弁とは中程で接する。間弁は中房まで達しない。形状は楔形。中房は突出し輪郭は圓線が廻る。蓮子は $1+4$ に配する。内区と周縁との境には太い圓線が廻る。周縁は素紋の斜線。瓦当裏面の下半は段がつく程周縁に沿った強いナデを行う。池田寺跡で同范品が出土している。池田寺I C型式。白鳳時代に属する。

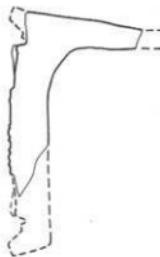
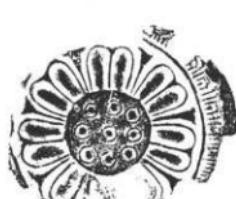
4	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	16.6	3.2	13.6	4.3	1.5	0.4	2.5	11.3



5 七葉複弁蓮華紋軒丸瓦

弁は七葉で、子葉は界線で隔される。中房は突出し、周環の廻る蓮子を $1+8$ に配する。間弁はT字形で中房まで達する。外区には雷紋が廻る。瓦当裏面は不定方向のナデ。間弁と外区の間に范傷が1ヶ所ある。「撰河泉出土古瓦の研究」に和泉市・和泉寺跡採集として紹介されている。三重県松坂市・高寺庵寺(淨泉寺)に同紋例あり。白鳳時代に属する。

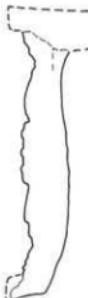
5	瓦当直径 (復元)	内区			外区幅		外区高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長	本来の外区	無紋の平坦部			
	15.2	5.2	11.6	3.0	1.0	0.8	1.0	2.1	9.0



6 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

弁は複弁で界線はない。中房は突出し、蓮子を $1+6$ に配する。間弁はT字形で中房まで達する。外区に弁端が三角形に尖る重弁型式の雷紋を廻らす。統一新羅時代瓦当紋様の影響を受けて、雷紋縁が成立したことを示す好例。瓦当裏面は中央付近をオサエ、その周囲を横方向にナデる。また、瓦当下半は周縁に沿ったナデを行い、断面形は瓦当面の方に傾く。丸瓦の接合は、丸瓦の広端凹面側を斜めに削り、瓦当裏面上端付近に接合する。周縁は素紋で直立する。瓦当面に范傷が3ヶ所みられる。九頭神庵寺で同范のものが出土している。白鳳時代に属する。

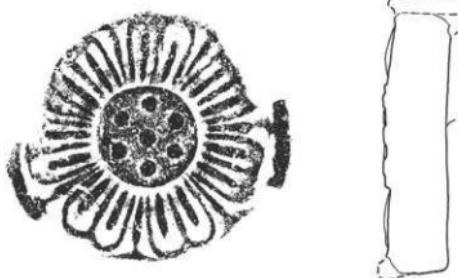
6	瓦当直径 (復元)	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
	18.0	4.0	11.0	3.6	2.2	1.3	0.9	2.4	4.7



7 七葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当面はやや平坦で、中房は突出するものの低い。大きめの蓮子を $1+6$ に配する。子葉は界線で隔される。間弁はT字形で中房にまで達する。瓦当裏面も平坦なナデ。大阪市・田辺廃寺で同范品が出土している。白鳳時代に属する。

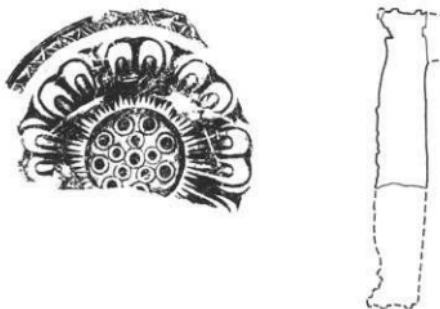
7	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	17.4	6.3	15.4	4.3	1.0	0.5	3.6	4.7



8 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当上半部が残存する。弁は子葉を突線で表現し、界線で隔す。間弁はT字形で中房まで達する。中房はやや突出し、周囲は圓線で囲まれる。周環の廻る蓮子を $1+5+8$ に密に配する。外区は斜線で複線鋸歯紋を配する。内区と外区の境は棒状工具によりナデを行う。瓦当裏面は不定方向のナデ。瓦当側面には型挽きの4重の圓線が廻る。瓦当裏面に浅い溝を彫り丸瓦を接合する。和歌山県和歌山市・上野廃寺で同范のものが出土している。白鳳時代に属する。

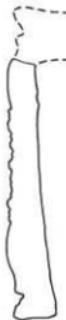
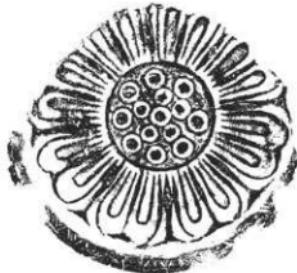
8	瓦当直径 (復元)	内区			外区幅		外区高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長	本来の外区	無綾の平坦部			
	17.8	6.2	14.8	4.1	1.0	0.5	0.8	3.1	3.4



9 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

8と同范。瓦当裏面は不定方向のナデ。上野廃寺で同范のものが出土している。

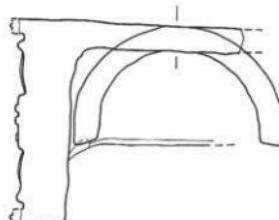
9	瓦当直径 (復元)	内区			外区幅	外区高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	19.2	6.8	16.0	4.5	1.6	0.7	2.2	2.8



10 八葉单弁蓮華紋軒丸瓦

弁端は大きく反転し、弁央には突線が走る。子葉は突線で表現される。間弁は楔形で中にY字形に突線が走る。中房はやや高く突出し、蓮子を1+6に配する。周縁は高く中央に圓線が廻る。瓦当裏面は雑なナデ。瓦当厚は厚い。白鳳時代に属する。『揖河泉出土古瓦の研究』に岸和田市・春木廃寺採集として紹介されている。

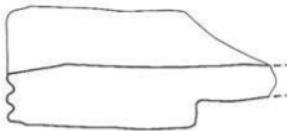
10	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	12.6	3.3	10.8	3.3	0.9	0.8	2.7	14.8



11 三重弧紋軒平瓦

型挽きで三重弧を施紋する。頸は深段頸。最下段の弧線に該当する部分は粘土を足して頸を形成する。平瓦凹面側瓦当寄りと、側面の凸面側に面取りを行う。平瓦部凹面には布目痕が残る。『攝河泉出土古瓦の研究』で貝塚市・半田廃寺(秦廃寺)採集の三重弧紋軒平瓦が紹介されているが、これとは別の資料である。白鳳時代に属する。

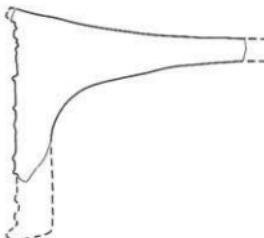
11	瓦当幅	瓦当厚	頸長	残存長
	—	3.7	11.7	16.8



12 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

弁が短く、中房が大きい。子葉は界線で隔され、間弁はT字形で中房まで達する。蓮子を1+5+9に配する。外区内縁に珠紋を配し内外に圓線が廻る。外区外縁は斜線で線鋸歯紋は不明瞭。丸瓦は瓦当裏面上端から少し下がったところに接合する。瓦当裏面上半部は丸瓦凹面からの一連のナデを行う。奈良県橿原市・本薬師寺と奈良市・薬師寺で同范例が出土している。本薬師寺では塔の裳層に使用された紋様であるが、丸瓦の接合状況から薬師寺のものと思われる。6276E型式。奈良時代初頭に属する。

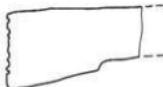
12	瓦当直径	内区			外区分縁幅	外区外縁幅		外区外縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長		本来の外区	蓋紋の平坦部			
	14.4	6.1	10.0	2.0	1.0	0.6	0.6	0.7	2.1	17.4



13 偏行唐草紋軒平瓦

左から右に向かって流れる唐草紋である。上外区は珠紋、下外区は線鋸歯紋を配する。頸は深段頸で、平瓦部凸面に朱線(ベンガラ)が残る。平瓦部凹面は横方向のナデを行う。本薬師寺西塔と薬師寺で同范品がみられる。664 I型式。白鳳時代に属する。

13	瓦当幅	瓦当厚	頸長	内区幅	外区		外縁幅	外縁高	残存長
					上外区幅	下外区幅			
	—	5.0	5.7	2.1	0.9	0.9	0.4	0.1	19.2



14 偏行唐草紋軒平瓦

右から左に向かって流れる唐草紋であるが、かなり退化している。上外区には23個の珠紋を配し、下外区には16個の線鋸歯紋を配する。瓦当右端には范端の痕跡が残る。瓦当左端部分には范傷が2ヶ所みられる。頸は深段頸である。瓦当面上端は面取りを行う。和泉市・坂本寺跡(禪寂寺)で同范品がみられる。奈良時代初頭に属する。

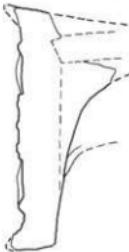
14	瓦当幅	瓦当厚	頸長	内区幅	外区			外縁幅	外縁高	残存長
					上外区幅	下外区幅	脇区幅			
	28.2	5.8	10.8	2.0	1.0	1.5	0.3	0.4	0.1	12.7



15 八葉単弁蓮華紋軒丸瓦

弁は弁端の反転が複弁風で、界線が中房まで達するが明確な子葉がないため単弁とした。各弁は各々中程で接する。よって間弁は中房まで達さない。形状はV字形である。中房は突出し、蓮子を1+8に配する。外区との境は2本の圓線がめぐり、内側は間弁と一体となっている。外区には唐草紋を廻らす。瓦当裏面はケズリを行う。丸瓦は先端未加工のものを瓦当裏面のやや下がったところに溝を彫って接合する。池田寺II B a型式軒丸瓦。池田寺跡、池田寺瓦窯で同范品が出土している。奈良時代前半に属する。

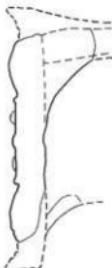
15	瓦当直径	内区			外区幅	外区高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
15	15.0	4.0	11.8	3.2	1.6	0.9	2.5	5.7



16 八葉単弁蓮華紋軒丸瓦

15と同じ池田寺II式軒丸瓦である。15より弁は立体的で、輪郭は直線で開まれる。間弁はY字形で各々連結し一周する。中房は突出し、輪郭は圓線が廻る。蓮子を1+8に配する。外区との境には圓線が廻り、唐草紋を廻らす。瓦当裏面は剥離しており不明。丸瓦は瓦当裏面に溝を彫って接合する。池田寺II B b型式軒丸瓦。『揖河泉出土古瓦の研究』に半田廃寺(秦廃寺)採集として紹介されている。白鳳時代に属する。

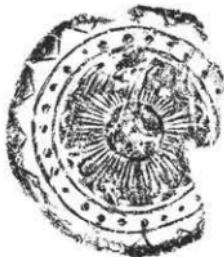
16	瓦当直径 (復元)	内区			外区幅	外区高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
16	16.6	5.3	14.2	3.6	1.2	0.7	1.6	6.1



17 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

平城宮6304系の紋様である。范がかなり摩耗しており、紋様の凹凸がほとんどなくなっている。弁は八葉であるが、割付に失敗しており、単弁になっている箇所が2ヶ所あり、厳密には7葉の複弁と2葉の単弁ということになる。中房は低く、蓮子は1+6に配する。外区は斜線で、外区内縁に珠紋、外区外縁に線鋸歯紋を配する。瓦当厚は厚い。丸瓦は、瓦当裏面に溝を彫って接合する。堺市・大野寺跡(土塔)で同范のものが出土している。また、同・土師觀音廃寺、大野寺跡(土塔)で紋様の明瞭なものが出土している。奈良時代に属する。

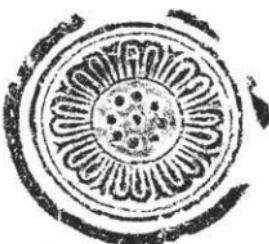
17	瓦当直径	内区			外区			瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長	内縁幅	外縁幅	外縁高		
	15.8	3.7	10.2	2.8	1.3	1.7	0.8	3.6	6.4



18 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

平城宮6225型式の紋様である。子葉は界線で隔される。間弁はY字形で中房にまで達する。中房は圓線のみで表現され、蓮子を1+8に配する。周縁との境には2重の圓線を廻らすが外側の方が太い。周縁は素紋で、低く直立する。いわゆる横置き一本作り技法で製作される。堺市・黒山廃寺で同范のものが出土している。奈良時代に属する。

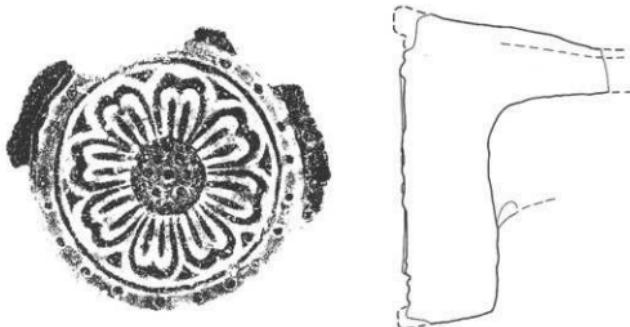
18	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	16.2	5.8	12.8	2.4	1.7	0.3	3.0	6.8



19 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

20と組み合う大振りな瓦である。瓦当面は平坦で紋様の突出はほとんどない。弁中央に子葉を隔す界線はない。中房は低く蓮子を $1+6+8$ に配する。間弁は楔形である。外区には珠紋を配し、内区との境には圓線が廻る。周縁は素紋で直立する。瓦当厚もかなり厚い。和泉市・和泉国分寺で同范のものが出土している。奈良時代末から平安時代初頭に属する。

19	瓦当直径	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
	19.8	4.7	13.6	4.0	1.3	1.8	0.6	4.7	13.5



20 均整唐草紋軒平瓦

19と組み合う。中心飾りではなく、3回反転する唐草紋が中心部で交差する。上外区、下外区、脇区には珠紋を粗に配する。顎は曲線顎である。平瓦部凹面側はナデを行うが、側面付近は布目痕が残る。瓦当上端、平瓦部凹面側面には面取りを行う。和泉国分寺出土のものと同范。奈良時代末から平安時代初頭に属する。

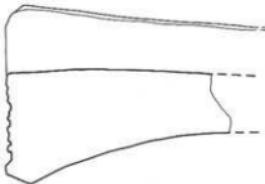
20	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外区			外縁幅	外縁高	残存長
				上外区幅	下外区幅	脇区幅			
	31.0	8.0	3.9	1.0	1.0	0.8	1.1	0.5	34.3



21 均整唐草紋軒平瓦

瓦当左半部が残存する。唐草紋は3回反転し、上外区、下外区、脇区には珠紋が粗に配される。瓦当下端は面取りを行い、顎は曲線顎である。平瓦部凹面には離れ砂が付着している。九頭神廃寺、京都府京都市・西寺跡で同范のものが出土している。枚方市・牧野坂瓦窯産か。平安時代前期に属する。

21	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外区			外縁幅	外縁高	残存長
				上外区幅	下外区幅	脇区幅			
	—	6.9	3.0	0.8	0.8	0.8	0.9	0.3	17.5



22 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当上端が欠失する。弁は輪郭が突線で表現される。弁端の反転は肉厚な表現で、子葉は界線で画される。中房は突線のみで表現し、蓮子は1+6に配する。外区は珠紋を密に配し、内外に圓線が廻る。周縁は斜縁で、外側に面をもつ。紋様は、薬師寺の復古型式で、39型式。平安時代中期に属する。

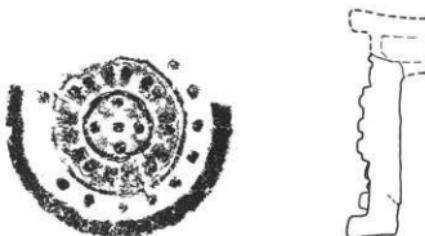
22	瓦当直径 (復元)	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
	18.2	6.0	12.0	3.2	1.1	2.0	0.8	1.7	3.5



23 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

全体にかなり摩耗している。弁は輪郭が突線で囲まれ、子葉の界線はない。中房は突出し、蓮子を $1+4$ に配する。外区には珠紋を粗に配する。内区と外区の境には圓線が廻る。周縁は素紋で直立する。珠紋と周縁の間に3ヶ所范傷がみられる。瓦当裏面は不定方向のナデ。丸瓦は瓦当裏面に溝を彫って接合する。平安時代中期に属する。

23	瓦当直径	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
23	13.6	4.3	8.0	1.5	1.4	1.4	1.1	2.0	4.0



24 十葉単弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当面は平坦で、弁は突線で表現される。間弁もV字形に突線で表現される箇所と立体的になっているところがある。瓦当厚は厚い。丸瓦は瓦当裏面上端から下がったところにわずかに溝を彫り接合する。岸和田市・小松里廃寺・同・畠遺跡、羽曳野市・河内飛鳥寺跡で同范のものが採集されている。平安時代後期に属する。

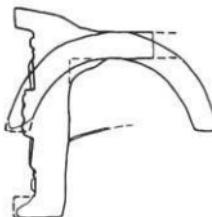
24	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
24	14.7	3.1	11.3	4.1	1.7	0.3	3.1	3.4



25 八葉単弁蓮華紋軒丸瓦

弁は剣先型を呈し、弁央が窪む。中房は突出し蓮子を $1+6$ に配する。外区には珠紋を密に配し、内側に圈線が廻る。周縁は素紋で直立する。内区に4ヶ所、外区に7ヶ所の范傷がみられる。瓦当裏面は横方向のナデ。堺市・陶荒田神社に同范のものがみられる。平安時代後期に属する。

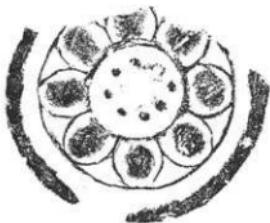
25	瓦当直径	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
	13.0	3.0	7.4	2.1	1.2	1.6	1.1	2.3	10.5



26 八葉単弁蓮華紋軒丸瓦

弁は肉厚で、輪郭は突線で表現される。中房も輪郭が突線で表現される。蓮子は $1+8$ に配される。周縁は素紋で直立する。内区と周縁の間には圈線が廻る。中房および輪郭と周縁の間に范傷が2ヶ所みられる。丸瓦は瓦当裏面に溝を彫って接合する。堺市・塩穴寺跡に同紋例がみられる。平安時代後期に属する。

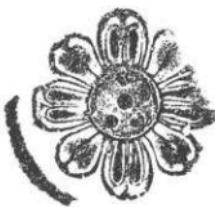
26	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	16.2	6.0	12.2	3.0	2.0	0.8	2.2	4.8



27 四葉単弁四葉複弁蓮華紋軒丸瓦

四葉の単弁と四葉の複弁を交互に配する。複弁の子葉は突線で囲まれる。単弁は界線がみられるのみで子葉はない。中房は低く突出し、輪郭部には圓線が廻る。蓮子は $1+5$ に配する。周縁は素紋で直立する。弁内に范傷が2ヶ所みられる。裏面は横方向のナデ。丸瓦は瓦当裏面に溝を彫って接合する。大野寺跡(土塔)、陶荒田神社、堺市・日置荘遺跡、同・深井清水町A遺跡で同范例が出土している。平安時代後期に属する。

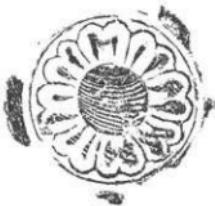
27	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	15.0	5.0	12.8	3.7	1.1	0.7	2.3	4.0



28 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

弁は肉厚で輪郭は突線で表現される。子葉の界線はない。中房は突出し、瓦当面には糸切り痕が残り、蓮子は1重であることが分かるものの配置は不明。周縁は素紋で直立する。内区と周縁の間には圓線が廻る。瓦当裏面は不定方向のナデ。瓦当厚は厚い。平安時代後期に属する。

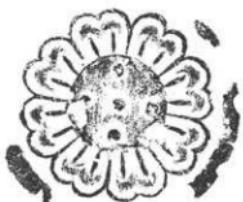
28	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	13.0	4.5	10.2	2.7	1.4	0.9	3.1	3.9



29 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

28と紋様構成が類似するが中房が大きく圓線がない。蓮子は $1+4$ 。瓦当裏面は不定方向のナデ。平安時代後期に属する。

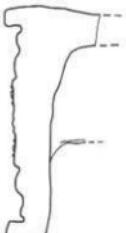
29	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	15.0	6.3	12.8	3.1	1.1	1.0	1.6	18.2



30 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

焼成が軟質で、瓦当面は摩耗している。弁は一枚ごとに隣の弁の間から覗かせるように配置されている。子葉を隔す界線はない。中房は突出し、周環の廻る蓮子を $1+6$ に配する。中房に大きな范傷がみられ、他にも4ヶ所ある。周縁は素紋で直立する。瓦当裏面は指で押さえつける。貝塚市・地藏堂廢寺で同范例が出土している。平安時代後期に属する。

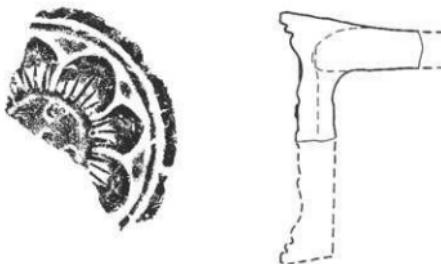
30	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	13.9	5.5	11.9	2.9	1.0	1.0	1.9	6.0



31 八葉单弁蓮華紋軒丸瓦

上半部約4分の1が残存する。弁は1枚ごとに大小になり、弁端は肉厚に反転を表現する。子葉は棒状に表現し、大きい弁は子葉が5本、小さい弁は3本となっているが、この表現はあるいは雄蕊帯を表したものかもしれない。中房は輪郭を突線で表現し、やや突出する。蓮子は1+4に配する。内区と周縁の境には圓線が廻る。周縁は素紋で直立する。瓦当面には細かい離れ砂が付着する。海会寺で同范例が出土している。平安時代後期に属する。

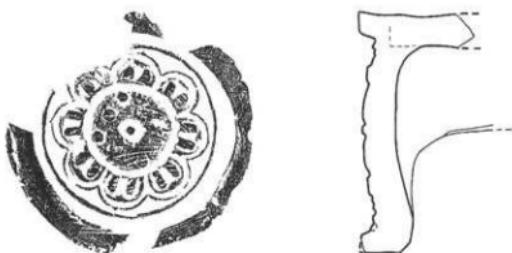
31	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径(復元)	弁長				
	15.6	6.0	13.4	3.2	1.2	0.5	2.3	9.0



32 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当面はてりむくりがみられる。中房が大きく、弁は短い。弁は肉厚に表現し、その外側を突線で囲む。子葉の界線はない。中房は半球状に突出し、1+8の蓮子を配する。なお、中心の蓮子部分は窪む。周縁は素紋で直立する。内区と周縁の間には圓線が廻る。瓦当面に范傷が3ヶ所みられる。瓦当裏面は不定方向にナデ、中央部が窪む。平安時代後期に属する。

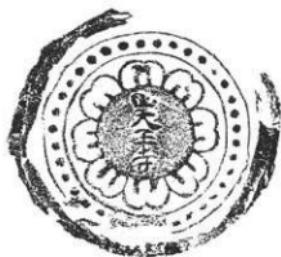
32	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	15.1	5.8	10.3	2.2	2.4	1.1	2.0	9.0



33 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

中房が大きく、その分弁は短い。子葉も短く界線はない。中房に「四天王寺」と陽刻する。外区には2重の圓線で囲まれた珠紋が廻る。瓦当面に范傷が16ヶ所ある。周縁は素紋で直立する。平安時代後期に属する。

33	瓦当直径	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
33	16.0	6.0	9.8	1.5	1.3	1.8	1.0	2.6	6.0



34 八葉单弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当面はかなり荒れている。弁は、弁端がやや尖り気味で細長い子葉を配する。中房は突出し、蓮子配置は摩耗しており不明。周縁には雄蕊帶が廻る。周縁は素紋で直立する。瓦当面に范傷がみられ、瓦当左半部には布を巻いた先端が平たい工具によるL字状の刺突痕が残る。瓦当裏面は雑なナデを行う。堺市・法華寺で同范例が出土している。平安時代後期に属する。

34	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径(雄蕊帶含む)	内区径	弁長				
34	14.6	3.1(5.0)	11.8	3.5	1.4	0.6	2.3	8.6



35 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

弁は細長く子葉の界線はない。中房は突出し、蓮子を1+8に配する。周囲に雄芯帯が廻る。内区と周縁との境には圓線が廻る。周縁は素紋で直立する。范傷のついた弁がある。瓦当裏面は不定方向にナデ、やや窪ませる。塩穴寺跡で同范例が出土している。平安時代後期に属する。

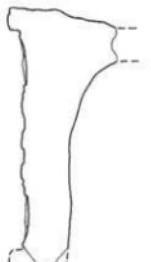
35	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径(雄芯帯含む)	内区径	弁長				
	14.6	3.4(5.2)	11.8	3.1	1.4	1.0	2.2	4.0



36 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

蓮華紋は対向する四葉を配し、それらの間に下から弁が覗く構成をとる。弁端の反転は棒状に表現する。中房は突出し、1+8の蓮子を配する。周囲には雄芯帯が廻る。周縁は素紋で直立する。瓦当裏面は摩耗のため調整は不明。平安時代後期に属する。

36	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径(雄芯帯含む)	内区径	弁長				
	15.9	5.8(6.8)	13.9	3.7	1.0	0.9	2.6	6.7



37 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

弁の輪郭は突線で表現する。内部は弁の上半が肉厚であり中心部が窪み、下半は子葉と雄蕊帯を同時に表現していると思われる。中房は半円形に突出し中心蓮子の部分は窪む。1 + 7 の蓮子を配する。瓦当裏面は周囲より中心部分が窪み、調整は不定方向のナデ。圈線と周縁の間に范傷が1ヶ所ある。小松里廃寺で同范のものがみられる。平安時代後期に属する。

37	瓦当直徑	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径(雄蕊帯含む)	内区径	弁長				
37	15.6	4.8(7.7)	11.6	1.7	2.0	0.9	2.6	9.8



38 八葉梵字紋軒丸瓦

中房および八葉の弁に梵字を配する。范はやや摩耗している。瓦当を正位置に置くと中房の梵字の向きは横向きとなる。中房には「アーヴ」(大日如来)を配する。周縁と内区の境には圈線が廻る。周縁は素紋で直立する。瓦当裏面は横方向のナデ。平安時代後期に属する。

38	瓦当直徑 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
38	14.8	6.3	11.8	3.0	1.5	0.9	2.5	5.9



39 八葉梵字紋軒丸瓦

38と同じく中房および八葉の弁に梵字を配するが、いずれも表裏逆になっている。瓦当を正位置に置くと中房の梵字の向きは天地逆向きとなる。中房部分は「アーク」(大日如来)を配する。周縁と内区の境には圈線が廻る。周縁は素紋で直立する。丸瓦は瓦当裏面に溝を彫って接合する。平安時代後期に属する。塩穴寺跡、河内長野市・觀心寺で同范のものが出土している。

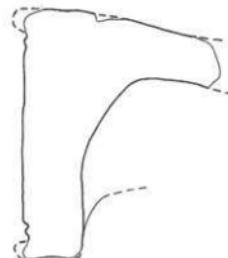
39	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	15.2	5.4	12.0	3.3	1.6	0.7	2.0	4.8



40 宝塔紋軒丸瓦

瓦当面に宝塔を配し背後を斜格子目で埋める。塔は、相輪、屋根、塔身、基壇からなる。相輪は露盤、屋根は本瓦葺きも表現する。塔身には鏡面を中心に据えている。基壇は蓮華紋で表現される。内区と周縁との境には圈線が廻る。瓦当面に12ヶ所の范傷がみられる。周縁は素紋で直立する。同范は多数の遺跡で出土しているが、同じ范傷をもつものは、堺市・仏光寺跡(B類)、貝塚市・長楽寺跡、和泉市・室堂磨寺、和泉国分寺にある。平安時代後期に属する。

40	瓦当直径 (復元)	内区径	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
	15.7	11.7	2.0	8.0	3.6	12.2



41 梵字紋軒丸瓦

梵字「アーケ」(大日如来)を配するが瓦当の取り付けは天地逆である。瓦当面に離れ砂が残る。瓦当裏面は雑にナデる。鎌倉時代に属する。

41	瓦当直径 (復元)	内区幅 (復元)	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
	13.6	11.0	1.3	1.0	2.0	3.2



42 菊花紋瓦

逆台形状を呈し、十二葉の菊花紋を配する。江戸時代に属する。

42	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	—	2.1	8.6	1.7	0.6	3.3



第3章 まとめにかえて

前章では、三宅雄一氏が熱心に収集された古瓦を紹介した。和泉の古瓦収集家は、堺市の小谷方明氏、井上正夫氏、前田長三郎氏、岸和田市の出口神暁氏などが著名である。これらの収集家の資料のうち、資料化されたのは小谷氏収集資料のみである。小谷コレクションは、氏がその一部の拓本とその解説を付した『和泉古瓦譜』を昭和13年(1938)に出版し、没後(財)小谷城郷土館から『和泉古瓦譜』(増補版)が平成9年(1997)に出版された。筆者もこの事業に関わり、収集資料の大半の拓本、実測図、写真を掲載し、解説を記した。三宅氏収集資料は、現在、阪南市教育委員会が、出口氏収集資料は大阪歴史博物館が所蔵している。一方、井上氏資料は現在も井上家に所蔵されている。前田氏収集資料は散逸しており、一部、大阪府立三国ヶ丘高校、大阪教育大学におさめられているものがそれのようである。

三宅氏収集の瓦には採集地の墨書がみられず、遺跡を特定できなかった。三宅氏は先述したように所蔵資料は堺市の勤務地に保管されていたため、戦時中の堺空襲により資料もその際被害を受けたようである。これは、同じく旧堺市街地に住まわれていた前田氏収集資料もかなりの2次焼成を受けており、同じ状況で墨書がみられないものがある。したがって、今回は同様あるいは同紋様の瓦が出土している寺院跡を文中に参考までに記した。ただ、藤澤一夫先生の名著「摂河泉出土古瓦の研究」には採集地点を明記した上で三宅氏の資料を紹介されているものがある。それらは、坂本寺跡・八葉素弁蓮華紋軒丸瓦(軒寺式)、信太寺跡・八葉素弁蓮華紋軒丸瓦、塙穴寺跡・八葉單弁蓮華紋軒丸瓦(西琳寺式)、春木庵寺・八葉單弁蓮華紋軒丸瓦(10)、海会寺・八葉單弁蓮華紋軒丸瓦(海会寺ⅠB型式)、海会寺・八葉複弁蓮華紋軒丸瓦(海会寺ⅡA型式)、秦庵寺・三重弧紋軒平瓦、和泉寺跡・七葉複弁蓮華紋軒丸瓦(紀寺式)(5)、堂ヶ芝庵寺・八葉複弁蓮華紋軒丸瓦(法隆寺式)、坂本寺跡・八葉複弁蓮華紋軒丸瓦(藤原宮式)、秦庵寺・八葉複弁蓮華紋軒丸瓦(池田寺Ⅱ式)、同(16)、坂本寺跡・均整唐草紋軒平瓦(藤原宮式)、和泉寺跡・細弁蓮華紋軒丸瓦であり、これらのうち今回の挿図に掲載されていないものが現在所在不明である。また、この書が戦前に出版されているものであることを考えると、瓦に採集地点の記載があった可能性が高い。たとえば、(5)の和泉寺跡採集の資料は、これが和泉寺跡唯一の資料であることから、瓦に注記があったか藤澤先生が三宅氏本人から採集地点を聞き取られて紹介されたのであろう。三宅コレクションの瓦は、紀伊や大和の資料が一部含まれるが、その大半は和泉を中心とする摂河泉地域で採集されたと考えられ、他の収集家の資料と同様な様相を示す。当資料の採集地点はあくまで推定の域を出ないが、調査事例の少ない寺院跡出土の資料を補完する役割を果たすものであり、今後の研究の進展に役立つことは疑いない。今後、出口コレクションをはじめとする貴重な資料の公開および資料化が進められることを期待してまとめにかえたい。

【参考文献】

藤澤一夫「摂河泉出土古瓦の研究－編年的様式分類の一試企－」『考古学評論第三輯 佛教考古学論叢』東京考古学会 1941年

東鳥取小学校寄贈瓦

東鳥取公民館寄贈瓦

第1章 はじめに

東鳥取小学校寄贈瓦は軒丸瓦2点、軒平瓦2点、格子叩きの平瓦1点、近世期の留蓋1点で、2004年8月に寄贈を受けた。

東鳥取公民館寄贈瓦は軒丸瓦5点、軒平瓦9点、鬼瓦1点、埠3点、丸瓦11点、平瓦12点で、1989年に寄贈を受けた。

これらの屋瓦が小学校、公民館に所蔵された経緯の記録は一切ない。

1958年刊行の根来治氏著の「東鳥取村誌」に「…略…大日堂跡と思われる辺りから盛んに焼け爛れた布目瓦が出土して好事家を喜ばせている。右出土した瓦の中、藤原期より鎌倉期にかけての鬼瓦、巴瓦、平唐草等が村立小学校に教育参考品として保管されている。」と記述があり、本報告掲載の47・49・52・53（東鳥取公民館寄贈）の瓦が写真とともに掲載されている。

また、49の平瓦部凹面には「昭和二十六年八月 平野山出土の瓦 雄信達小学校 神波先生寄贈」の墨書きがあり、44（東鳥取小学校寄贈瓦）・61（東鳥取公民館寄贈）にも「紀州国分寺」の墨書きがある。49の墨書きと同じ筆跡と思われる。

以上のことから、1951年に村立小学校（現在の東鳥取小学校と思われる）に寄贈されたものが何らかの理由で一部公民館に移動したのではないかと推測される。

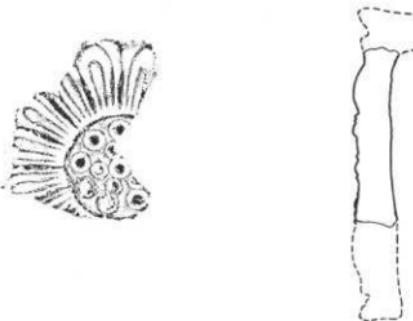
今回は軒瓦と鬼瓦、埠のみ掲載した。

第2章 東鳥取小学校寄贈瓦

43 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当左半部4分の1が残存する。子葉は突線で表現され、界線で隔される。間弁はT字形で中房まで達する。中房は突出し、外側は突線で囲まれる。蓮子は周環で囲まれ、他資料より1+5+8に配することがわかる。瓦当裏面は一定方向のナデ。三宅氏資料8、9と同范。上野庵寺で同范のものが出土している。白鳳時代に属する。

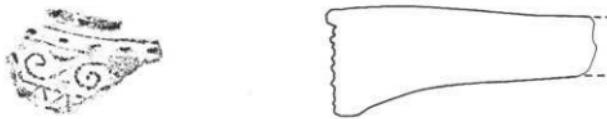
43	瓦当直径	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	—	6.3	—	4.6	—	—	2.4	—



44 均整唐草紋軒平瓦

「紀伊国分寺 布目瓦」の墨書がある。瓦当左半部端付近が残存する。唐草は2反転分が残る。上外区は杏仁形の珠紋を、下外区には線鋸歯紋を配し、いわゆる天星地水の配置をとる。瓦当上端は幅広い面取りを行う。頸は下面に幅の狭い面をもつ曲線頸である。平瓦部凸面には継方向の縄を巻いた叩き板のタタキ痕が残り、凹面は布目痕が残る。奈良時代に属する。

44	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外区			外縁幅	外縁高	残存長
				上外区幅	下外区幅	脇区幅			
	—	6.5	2.8	1.4	1.0	—	1.1	0.5	16.5



45 均整唐草紋軒平瓦

瓦当左半部が残存する。中心飾りは半分だけ残り、2枚一組の唐草が3反転する。2本目までは巻き込む子葉がとりつく。外縁は直立し、珠紋を配する。額は直線額である。平瓦部は凹凸面ともにナデを行い、凹面にはわずかに布目痕が残り、側端部凹面側は面取りを行う。上野廢寺に同范例がみられる。白鳳時代に属する。

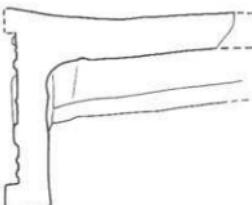
45	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	—	3.7	2.7	0.5	0.2	18.5



46 巴紋軒丸瓦

左巻きの三巴紋である。巴の断面は台形。外区には珠紋が比較的密に廻る。周縁は素紋で直立する。瓦当裏面には離れ砂が付着している。瓦当裏面は周囲に沿ったナデ、中央部は不定方向のナデを行う。丸瓦は瓦当上端から下がったところに取り付ける。阪南市・平野寺(長楽寺)跡で同范品が出土している。室町時代に属する。

46	瓦当直径	内区径	巴巻	外区幅	珠紋数	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
	12.8	7.0	左	1.2	20	1.7	0.8	2.1	14.5

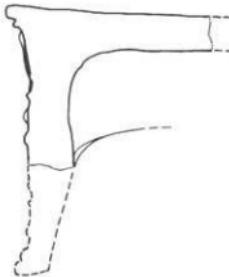
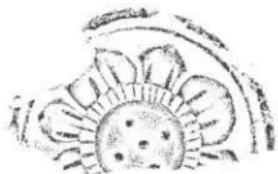


第3章 東鳥取公民館寄贈瓦

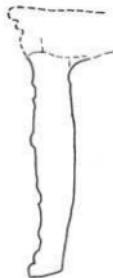
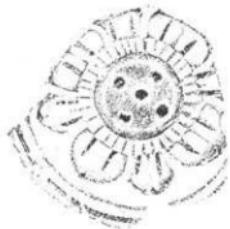
47・48 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

47は瓦当上半が残存し、48は瓦当周縁上半部を欠失する。大きい弁と小さい弁を交互に配する。子葉は界線で隔されるが、大きい弁、小さい弁各1枚ずつ界線がないものがみられる。中房はやや突出し、蓮子を $1+4$ に配し、周囲には有芯帯が廻る。内区と周縁の境には太い圓線が廻る。瓦当裏面は雑なナデ。丸瓦は接合式。48の側面には糸切り痕が残る。平安時代後期に属する。平野寺(長楽寺)跡で採集。

47	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長				
	16.4	5.5	14.0	2.9	1.2	0.5	—	13.5



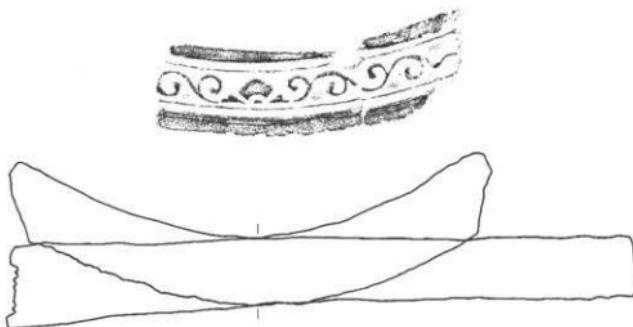
48	瓦当直径 (復元)	内区			周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径(復元)	弁長				
	16.6	5.4	14.2	2.7	1.2	0.4	2.1	4.0



49～52 均整唐草紋軒平瓦

立体的に表現する半裁花紋の中心飾りから唐草が5反転し、4反転までは唐草が巻き込む。内区と外縁の境には界線が廻る。額は直線額である。平瓦部凸面は縄を巻いた叩き板で叩いた痕跡と離れ砂が残る。凹面は、布目痕と糸切り痕が残る。側面上端には面取りを行う。52は、二次焼成を受けており、凹面側端から幅4cmのところで、屋根に葺かれていた時の丸瓦と組み合っていた痕跡が残る。49には、「昭二十六年八月 平野山出土の瓦 雄信達小学校 神波先生寄贈」の墨書がある。平野寺(長楽寺)跡で同范品が出土している。平安時代後期に属する。

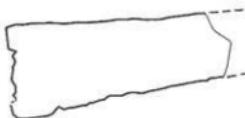
49	瓦当幅 (復元)	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	30.0	5.1	2.4	1.6	0.5	38.2



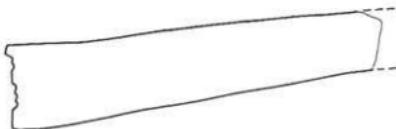
50	瓦当幅 (復元)	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	32.0	5.4	2.4	1.8	0.5	9.8



51	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	—	5.6	2.4	1.6	0.5	13.3



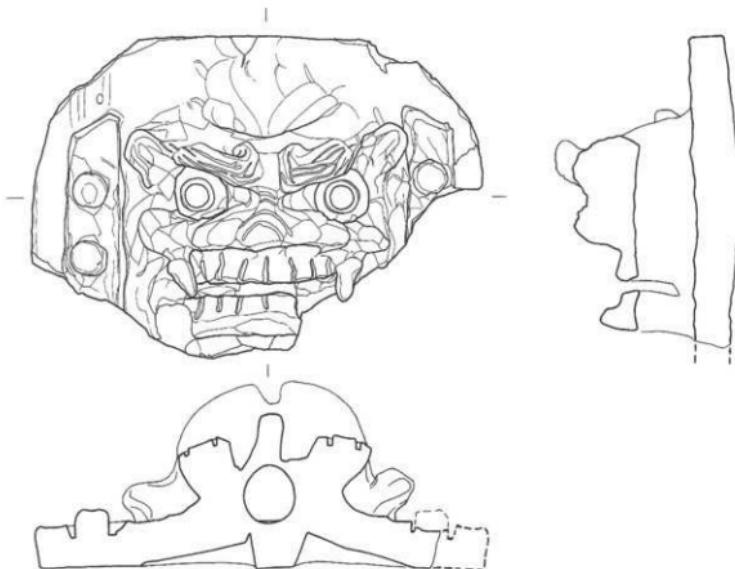
52	瓦当幅 (復元)	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	全長
	33.6	5.1	2.4	1.7	0.5	24.8



53 鬼瓦

半円形に近い板上に手づくねで鬼面を作る。下半部が欠損する。鬼面は方形の輪郭に取まり、写実的に表現されている。眉と鼻は連接し、目は突出し、目玉は線刻で表現する。頬は円形に突出し、その下端から牙が派生する。歯は線刻で表現する。両端には縦方向に円形の珠紋帯がみられる。裏面は縦方向の把手を作り出す。鎌倉時代後半に属する。

53	長さ	幅	厚さ
	19.8	27.5	11.4



54 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当上半部約4分の1が残存する。弁の輪郭は突線で表現され、子葉は肉厚である。間弁はT字形で中房まで達する。外区には珠紋を粗に配する。周縁は素紋で直立する。丸瓦は、浅い溝を掘って接合する。奈良時代に属する。

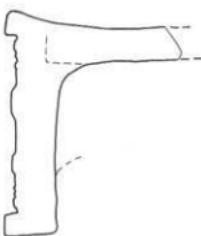
54	瓦当直径	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
	—	—	—	2.7	1.4	1.3	0.7	—	3.5



55 巴紋軒丸瓦

瓦当面は完存する。左巻きの三巴紋で、巴の頭はやや尖り気味。断面は台形。内区と外区の境には圈線が廻る。珠紋は29個。周縁は直立する。瓦当面には離れ砂が付着する。瓦当裏面は不定方向のナデ。側面は縦方向の削りを行い、その痕跡の段が付いている。丸瓦は瓦当上端からやや下がったところに、わずかに窪ませた程度で接合する。室町時代に属する。

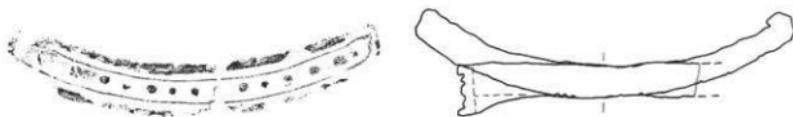
55	瓦当直径	内区径	巴巻	外区幅	珠紋数	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
	13.9	8.5	左	1.0	29	1.7	0.8	2.8	11.3



56 連珠紋軒平瓦

14個の珠紋を配する。外縁との境には界線が廻る。外縁は素紋で直立する。頸は曲線頸。平瓦部凸面は粗い繩叩き、凹面には布目痕が残る。鎌倉時代に属する。

56	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	22.0	3.1	1.4	1.0	0.4	17.0



57 連珠紋軒平瓦

瓦当左半部が残存する。珠紋は大振りで瓦当面に離れ砂が付着する。頸は段頸である。鎌倉時代に属する。

57	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	—	3.6	1.4	1.1	0.6	10.0



58 唐草紋軒平瓦

瓦当左半部が残存する。単体の唐草の3反転分が残る。瓦当上端に面取りを行う。頸は段頸である。室町時代に属する。

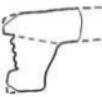
58	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
—	4.7	2.2	1.1	0.7	4.0	



59 唐草紋軒平瓦

瓦当中央付近が残存する。中心飾りの右半分と唐草1反転分が残る。頸は段頸。瓦当面に離れ砂が付着する。平野寺(長楽寺)跡で同范品が出土している。室町時代に属する。

59	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
—	4.7	2.2	1.4	0.8	7.0	



60 唐草紋軒平瓦

瓦当左半部が残存する。唐草の3反転分が残る。額は段額。瓦当面に離れ砂が付着する。平瓦部凹面には布目痕が残る。平野寺(長楽寺)跡で同范品が出土している。室町時代に属する。

60	瓦当幅	瓦当厚	内区幅	外縁幅	外縁高	残存長
	—	4.1	2.2	0.9	0.4	10.1



61 八葉複弁蓮華紋軒丸瓦

瓦当上半部が残存する。弁、中房は突線で表現され、弁内に子葉はない。間弁はY字形で中房まで達する。内区と外区の境には珠紋を粗に配し、珠紋間に范傷がみられる。周縁は低く直立する素紋。瓦当上面は横方向のナデ、丸瓦部に向けて斜めに削りを行う。少量のキラコが付着する。「紀伊国分寺布目瓦 巴瓦」の墨書がある。江戸時代後期に属する。

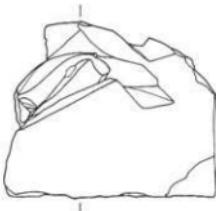
61	瓦当直径	内区			外区幅	周縁幅	周縁高	瓦当厚	残存長
		中房径	内区径	弁長					
—	—	—	—	2.0	1.6	1.8	0.2	—	5.8



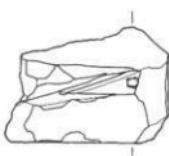
62~64 不明製品

62は厚さ4.3cmの方形を呈すると思われる製品。片面には紋様を施紋する。62・63ともに窪みの中に浮き彫りし、62は不明、63は珠紋である。

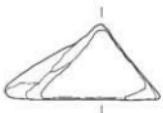
62	縦	横	厚さ
	10.7	12.9	4.3



63	縦	横	厚さ
	7.0	9.8	3.0



64	縦	横	厚さ
	4.6	9.4	3.2



第4章 まとめにかえて

東鳥取小学校、東鳥取公民館寄贈瓦は阪南市平野山出土のもの、紀州の寺院のもの、採取地不明のものに分かれる。

ここでは、平野山について簡単に触れておきたい。

平野山は和泉山脈より派生する高田山丘陵のさらに北に続く独立丘陵で、阪南市東部を流れる男里川と菟坂川の間に位置する。七堂伽藍の寺院伝説があり、実際に布目瓦が出土していたようである。

現在、丘陵の北端部に「平野山長楽寺」という寺院があり、本尊は室町時代の十一面觀音菩薩立像である。

1970年、大阪府教育委員会によって、府道和泉鳥取南海線の建設で削平される丘陵西南部の試掘調査が行われたが、報告が出版されていない為に詳細は不明である。

「和泉古代文化研究会会報」によると、調査は丘陵裾部から頂上までの斜面に等高線に沿ったトレンチを6ヶ所設定し、中腹の平坦部から石積み基壇、石積み遺構などが発見されている。それに伴って鎌倉～室町時代に該当する瓦、土器類の出土がセメント袋100袋におよぶとある。

その後、現在の長楽寺の一角を除くほぼ全山でゴルフ場開発が行われたが、その際は調査されていない。

1994年、阪南市教育委員会では同地の大規模開発計画に先立って試掘調査を行った。丘陵の中央部と西南部の2ヶ所で遺構、遺物を確認し、工事により削平される西南部の発掘調査を行った。

その結果、室町時代から江戸時代にかけての寺院跡と思われる基壇や塀、井戸などを検出し、屋瓦をはじめとする多くの遺物が出土した。瓦類は軒丸瓦35種類(全て巴紋瓦)、軒平瓦29種類である。しかし、今回、挿図47・48の軒丸瓦は出土せず、挿図49～52の軒平瓦も水路の石組みに転用されているものが、数点見つかったに過ぎない。なお、この調査により挿図46・59・60(室町時代)と同范のものが出土し、その時点でこれらの寄贈瓦が平野寺跡のものと判明した。

【参考文献】

- 根来 治 『東鳥取村誌』 1958年
和泉古代文化研究会『和泉古代文化研究会会報』 1970年

考　　察

三宅コレクション 九頭神廃寺出土軒先瓦について

竹原 伸仁

九頭神廃寺は、河内国の最北端、交野郡（8世紀以前は茨田郡、現・枚方市牧野本町）に所在する古代寺院跡で、その存在の確認は、明治20年代に地元住民による銅造誕生釈迦仏立像（現・枚方市指定有形文化財）の発見に端を発する。その後、昭和8年（1933）の大阪史蹟會による発掘で焼けた土壙とともに、長大な釘、青銅製品、大量の瓦が出土し、伽藍遺構の一部が確認されたが、第二次世界大戦後の大阪府営住宅の建設や、民間の宅地開発等により、もはや旧状を留めず、その地点すら忘れ去られていった。

しかし、昭和58年（1983）、地区の個人専用住宅建設に伴って瓦が大量に出土したことをきっかけとして、工事立会を含む悉皆調査が行われた結果、平成5年（1993）⁽¹⁾には、外装を瓦積とする建物基壇の東辺が、そして平成8年（1996）⁽²⁾には同北辺と北東隅部が確認され、出土軒瓦類や、基壇築成土の状況から、7世紀末葉～8世紀前葉に創建された、一辺10.5～11.0mの塔基壇であることが確認されたものである。また、塔基壇の下層から長大な掘立柱回廊と、それに接続する大型掘立柱建物も検出されており、これらは前身寺院の遺構である可能性が高い。なお、現在では、九頭神廃寺の伽藍地東・北・西端の他、「建立氏族の居館」や「倉垣院」とされる倉庫群などが確認されているが、確定には今のところなお時間を要するものと思われる。また、伽藍配置も現在のところは不明である。

遺物としての瓦類も古くから知られており、昭和5年（1930）の石田茂作氏⁽³⁾や同11年（1936）の大脇正一氏⁽⁴⁾の記述によって公表され、その後、昭和16年（1941）には藤澤一夫氏⁽⁵⁾が「摂河泉出土古瓦の研究」の中で九頭神廃寺出土の軒先瓦を紹介、瓦当文様等の差異により型式名を付して分類しており、以後も、軒先瓦分類については、基本的に藤澤氏の研究に依拠したものとなっている。なお、塔基壇の調査成果を踏まえ、現在では軒丸・軒平瓦とも、飛鳥時代後期から平安時代前期に至る9型式10種が認定されている⁽⁶⁾。

（1）単弁八弁蓮華文軒丸瓦（図版-1）

KZM11A型式。それぞれが独立した幅の狭いくぼんだ花弁の中央に、花弁を縦に二分割するかのように、中房から周縁まで鎬が通される、九頭神廃寺特有の軒丸瓦の一つである。完形例を参照すると、瓦当面径は約19.2cmで、九頭神廃寺出土軒丸瓦の中では最大である。中房の直径は約3.5cmで、内部には1+6の蓮子が配されるが、割付は不均等である。間弁は栓状化した楔形で、先端は大きく肥厚するが、横方向には伸びない。一見、花弁や間弁は中房には接していないようにみえるが、別資料を詳細に観察すると、部分的には接しており、作範当初はすべての花弁・間弁が、中房と接することを意図していたと考えられる。なお、本例には認められないが、別資料では中房部が、範の傷みによって木目が浮き彫り状になっているものもあり、本例は範が新鮮な段階のものであることを示している。

瓦当部と丸瓦部の接合は、瓦当裏面上端で行われるが、接合に伴う丸瓦部先端や瓦当裏面

の加工は全く認められず、また、接合用の補強粘土の量も比較的少ない。凹面側は接合線に沿ってナデ、凸面側は顎面を含め、横方向のナデで仕上げられ、瓦当裏面も主に横方向のナデで丁寧に調整されている。なお、従来、丸瓦部凸面側の調整痕はナデ等により不明であったが、本例によると斜格子タタキ目を残す箇所もある。

九頭神廃寺出土の軒丸瓦の大きな特徴として、瓦当裏面中央が緩やかに盛り上って半球状となっている例が多く、KZM11A型式、及び次の2(KZM22型式)を含め、9型式中4型式を数える。こうした特徴を有する類例としては、近隣では、回転台を用いて瓦当部成型を行うとされた楠葉・平野山瓦窯跡群出土の素弁八弁蓮華文軒丸瓦(四天王寺創建所用軒丸瓦、法隆寺4A型式⁽⁷⁾と同范)にもみられるが、本例は成型に回転台を使用した明らかな痕跡は見出せない。

本例を含め、概ね胎土は精良であり、焼成は硬質、色調は灰色を呈するものが多い。出土傾向としては、伽藍地想定域全般から出土するが、個体数は非常に少なく、どの堂塔に伴うかは不明である。ただし、文様構成等から生産年代が7世紀中葉まで遡る可能性もあり、前述の塔基壇下層の掘立柱回廊、あるいは大型掘立柱建物に伴うことも考えられる。

KZM11A型式は、瓦当文様の系譜等から、従来から高勾麗系、あるいは高句麗新羅系軒丸瓦と位置づけられてきたが、九頭神廃寺以外での同范例がなく、詳細は不明である。組み合う軒平瓦も不明。

(2) 複弁八弁蓮華文軒丸瓦(図版-6)

KZM22型式。塔基壇周囲から集中的に出土することから、九頭神廃寺の塔所用軒丸瓦とみてよい。完形例を参照すると、瓦当面径は約19.0cm、また、直径3.8cm程度のやや小さめの中房内には蓮子を1+6に配している。内区の花弁は盛り上がりをもち、弁端にも蕊状の文様を付加して立体的に表現することから、いわゆる重弁蓮華文を意識した仕上がりとなっている。外区にはいわゆる「紀寺式」の最大の特徴である「雷文」を飾るが、KZM22型式は一般的な「紀寺式」の線的な「雷文」とは趣きが異なり、立体的に剝頭文状の文様を重ねている。また文様間にもさらに間弁のような蕊状の表現があることから、外区の文様も花弁を表現していることになり、「花弁文」とするのが適当と考える。なお、花弁文は、内区の蓮華文の弁央と間弁の位置に対応するように、整然と割付がなされている。瓦当面全体の特徴としては、四重以上の重弁蓮華文を表現していると考えられることであり、本廃寺特有の軒丸瓦の一つとして夙に著名である。

本型式のもう一つの特徴として、製作技法の差異が挙げられる。本例については、完形例を参照すると、KZM11Aと同様に瓦当裏面が半球状に膨らみ、丸瓦部を瓦当裏面に挿し込みます、丸瓦先端部がそのまま瓦当面周縁の上部となるよう、つまり、あたかも、丸瓦部凹面側に下から瓦当面文様部と周縁下半部を嵌め込むようにして仕上げる手法を探っていると考えられる(KZM22b型式)。他に、瓦当裏面が平坦、かつ上部に溝をつけて、丸瓦部の先端を挿し込むという通有の手法を探るものもある(KZM22a型式)が、22a・bとも瓦当面の范キズの位置、

あるいは文様構成が完全に一致していることから、瓦当范は当初から单一范であり、焼成や胎土等の特徴も同一であることから、生産地の違いは考えられない。また、范キズの進行と製作技法の差異には因果関係が認められないため、22a・b間の生産時期の前後関係は不明であるが、数量的にはKZM22b型式が圧倒的に多い。

本例を含め、概ね胎土は精良、焼成は硬質、色調は灰色を呈するものが多いが、KZM22a型式の中には灰白色で、やや軟質なものも見受けられる。九頭神廃寺塔基壇が、飛鳥IV期所産の遺物を包含する整地層上に築成されていることから、KZM22型式は7世紀末葉～8世紀前葉の所産と考えられる。直線額で薄手の三重弧文軒平瓦(KZH22型式)と組み合う。

(3) 均整唐草文軒平瓦(図版-21)

KZH31型式。牧野阪瓦窯(枚方市牧野阪)産で、「西寺」や「西淨」銘の文字瓦とともに、平安京・西寺所用瓦の同范品の一つである。本例は瓦当面の中央から向かって右半分は欠損しているが、完形例によれば、内区の中心飾りは形骸化した対葉花文で、C字対向をさらに外側から取り巻くように対葉形が配されるが、先端は開かず粒状となっている。左右に展開する主葉は先端の巻き込みが強く、長い尾部を持つ。基本的には左右対称であるが、支葉の単位の一部の形状や本数が非対称となっている。

九頭神廃寺所用の軒平瓦の中で、唯一曲線額の型式であり、下外縁沿いに幅2cm程度の面取りが加えられている。平瓦部の凹面は、上外縁から5cm程度の区間を横方向のヘラケズリで調整するほかは、不調整で布压痕が残存する。凸面は全面にわたって縦方向のヘラケズリで調整され、タタキ目を残さない。色調は黄褐色を呈し、焼成も硬質であるが、本例を含めわずか数点しか出土しておらず、全体の特徴の傾向はなお不明である。9世紀前葉の所産である。

【註】

- (1) 『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』(枚方市文化財調査報告第32集) 枚方市教育委員会 1997年
- (2) (1)に同じ。
- (3) 石田茂作他『古瓦図鑑』 1930年
- (4) 大脇正一「古瓦新講(四)・(五)」『史迹と美術』70・72 1936年
- (5) 藤澤一夫「摂河泉出土古瓦の研究－編年的様式分類の一試企－」『仏教考古學論叢』 1941年
- (6) 以下の分類は、前掲(1)による。
- (7) 『法隆寺の至寶 瓦』(昭和資財帳15) 1992年の分類による。

「一瓦一会」 瓦当側面接合技法-SR技法-の軒丸瓦について

大脇 潔

1 現代史の証人となった古瓦

2005年7月9日、三宅雄一氏旧蔵の瓦を観察する機会を得た。どの瓦も真っ赤に焼け独特の触感と持ち重りがある。いくつか手にしているうちに、この中には誕生時の窯の火と米軍の空襲による猛火、また中には伽藍を焼き尽くす劫火と、三度火を潜ったものがあるかも知れないということに気づいた。

60年前に当時の色合いと質感は失われた。しかし、焦土から甦った彼らは歴史の証人としての価値をいささかも失わず、これからも収蔵庫の中で静かに生き続けることだろう。今日ここで出会った私は、黙して語らない彼らから何を後世に伝えることができるだろうか。そんなことを考えているうちに「一期一会」ということばがうかんだ。

「そうだ、この縁を大切に彼らの語る生い立ちと生涯を聞こう」

こうしていささか陳腐で恥ずかしいのだが「一瓦一会」という表題が生まれた。

2 池田寺式軒丸瓦の系譜

三宅コレクションの全容については第2章の解説を参照していただくこととし、ここでは和泉市池田寺跡出土のI B b型式の軒丸瓦（図版3、第1図-2）との「一瓦一会」の縁を述べることにしよう。以前から気になっていた特異な軒丸瓦の作り方とその分布が示す歴史的意義について、一度整理しておきたいと思ったからである。赤変したこの軒丸瓦は、その特徴的な接合技法を語る上できわめて有効な資料である。

この軒丸瓦は外縁-周縁-の上半分と丸瓦部をすべて失うが、中房に1+6の蓮子を配し、低い外縁を無紋とする素弁8弁蓮華紋軒丸瓦である。もう少し細部を説明すると、縁に圓線をめぐらす中房はわずかに突出し、蓮弁の輪郭に沿って細い凸線がめぐる。間弁は中房に達せず、内区と外区の間には1条の圓線がめぐる、ということになろう。

池田寺跡では同型式の軒丸瓦が4種類知られているが（上田2000）、正報告書が未刊なので詳細は不明。蓮子配置が1+8のI A型式（第1図-1）と、1+6で弁央に細い凸線をあらわすI B a型式（第1図-4）と凸線がないI B b型式（図版3、第1図-2）、1+4のI C型式（図版4、第1図-3）があり、瓦当裏面下半の側面に沿う強いナデなど共通する点が多いのでほぼ同時期の製品と推定できる（注1）。

その紋様はありふれているように見えるが、外縁が無紋で内区と外縁の境に太い圓線をめぐらすこと、蓮弁の輪郭線が中房近くでは互いに接することなど厳密に分類していくと意外に類例は少ない。わずかにI A型式が和泉寺跡から、I AかI B型式が不明な資料とI C型式が坂本寺跡から出土しているだけなので、和泉郡の狭い範囲に分布する型式ということになろう（近藤1997）。いずれも蓮弁に子葉をあらわし、外縁を少し高くして上に重圓紋をめぐらせば山田寺式軒丸瓦となる。

こうした特徴から藤澤一夫先生はこの一群を「古市寺式（山田寺式）亜式－池田寺式軒丸瓦－」と名づけ（藤澤1941）、これまでその文脈の中で理解されてきた。ところが、この説が発表されたのは、弁央に凸線をあらわす I B a 型式の存在が知られていない戦前のことである。また近年は、大和吉備池廃寺や揖津四天王寺出土の古式の山田寺式軒丸瓦の紋様の影響を受けて池田寺式軒丸瓦が成立したとする説明もみかけるようになった（近藤1997、奥村2006）。しかし、今回試みた接合技法からのアプローチによれば、「古市寺式（山田寺式）亜式－池田寺式軒丸瓦－」説については別の系譜を考えるべきであると思われるが、それについては最後にふれることにしよう。

3 I B b 型式の接合技法

前置きはこれくらいにして本題に移ろう。印象に残ったのは I B b 型式の接合技法で、つぎのような痕跡が観察できる。

1. 瓦当面上半分の外縁と丸瓦が完全に剥離する。この剥離面をどう呼ぶかむつかしいが、以下第1図6・7にしたがい丸瓦側の剥離面をA面、瓦当側の剥離面をB面とよぶことにする。丸瓦部を失ったB面には瓦当面－紋様面－ぎりぎりまで丸瓦凹面の布目压痕－ネガ＝陰画－が反転してついた布目のポジ＝陽画が残る。

2. 瓦当面上半の内区と外縁の境、本例の場合は圓線の外になるが、そこには、范から外したままのいわゆる范肌ではなく、接合時に丸瓦と瓦当の間にできた隙間－瓦当面側の接合線－を埋めるために、范から外したあとにヘラでナデた痕跡が残る。

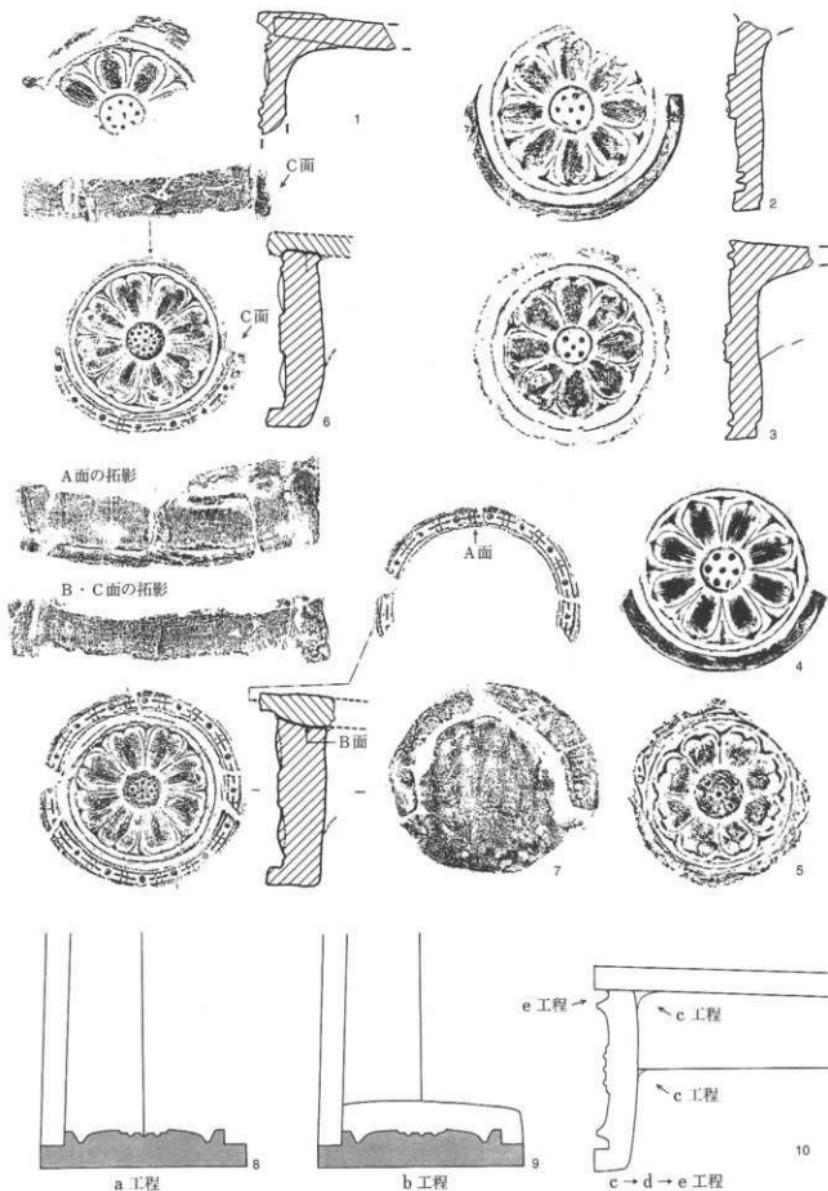
3. 瓦当下半に残る外縁の上端には、両側とも丸瓦の側面が直接接合していたことを示す压痕が残る。これを丸瓦側面の压痕、C面と呼ぶ（注2）。

こうした痕跡からその作り方を復元すると、一体の粘土からなる内区と下半の外縁の上に別作りの丸瓦が被り、それがそのまま下半の外縁となる特殊な接合法であると理解できる。その工程を、同様の痕跡を残す山背御用谷窯（第1図-6・7）や安芸明官地廃寺例（第2図-2・3・7～9）、やや異なる痕跡を残す池田寺 I B a 型式（第1図-4）や揖津金寺山廃寺例（第7図-8・9、注3）を参考に復元すると次のようになる。

4 工程の復元1－丸瓦先置き式－

この技法のひとつのキーポイントは、まず丸瓦－やや薄手のものが多い－を范に立て、つぎに瓦当の内区+外縁の下半分の粘土を接合する点にある。

- 瓦当范の外縁部分に丸瓦の広端面を置いて立てる－丸瓦先置き式－（第1図-8）。
- 范に瓦当の内区+外縁の下半分の粘土を上から押して施紋するとともに丸瓦と接合する（第1図-9）。なお同様の製作技法で作られた明官地廃寺には、外縁下半を形成する粘土紐をまず范に詰め、その上に内区部分の粘土を詰める例がある（第2図-2・3・7）。またこの時、粘土紐の接合面にヘラで傷をつける例もあるという（第2図-7）。
- 瓦当裏面の内区部分と丸瓦凹面の間に生じた接合線－隙間－に沿って接合用粘土を加え補



第1図 池田寺の軒丸瓦とSR技法の工程復元
(1~5 池田寺、6・7 御用谷窯、縮尺1:4、8~10 SR-1a技法の工程復元)

強する（第1図-10）。

d. 范から外す。

e. 瓦当面の外縁上半-丸瓦部分-と内区との境に生じた接合線-隙間-をヘラや指先などでナデて補強する（第1図-10）。この時のナデが大胆だと、紋様の一部がつぶれてしまう場合がある（第7図-3、九頭神廃寺例）。また外縁の上半と下半の境に生じた丸瓦の側面と下半の外縁との接合線-隙間-をナデて消し補強する。

f. 完成。丸瓦凸面を下にして横たえ乾燥させる。

なお関連資料のすべてを観察したわけではないのでまだ感想にすぎないが、この丸瓦先置き式が多数派を占め、つぎに紹介する瓦当先置き式は少数派になるようである。

5 工程の復元2-瓦当先置き式-

この逆の工程があることも池田寺IBa型式（第1図-4）や金寺山廃寺例で確認できる（第7図-8・9）。

a. 范全体を覆うだけの粘土を押して瓦当を作る-瓦当先置き式-。

b. 次いで外縁の上半を兼ねる丸瓦を挿入するために不必要的部分の粘土を削り取り、丸瓦を接合する。

c. 以下、丸瓦先置き式とおなじ。

この技法の存在は、B面に不必要的粘土を指で削り取った際のナデの痕跡を残す池田寺IBa型式や、ヘラで削り取った際に移動した砂粒の動きで生じたごく細い沈線-いわゆるヘラ削り痕-が何本か瓦当面に平行して走る金寺山廃寺例などによって証明できる。なおこのヘラ削り痕はきわめて直線的、かつ平行していることを特徴とするが、これはヘラの先端が范の内区と外区の境の段に沿って走ることによって生じたものと思われる。

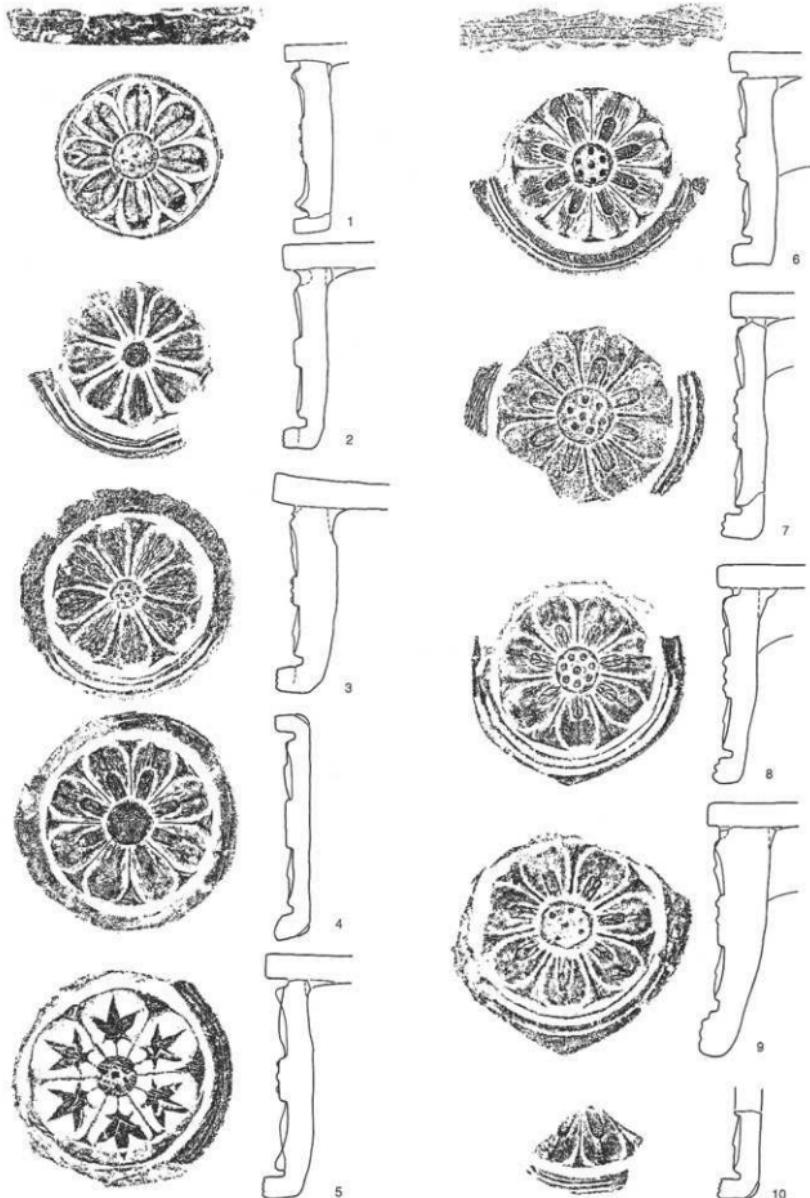
6 接合時の加工

丸瓦先置き式でも瓦当先置き式でも、接合に際してA面やB面にヘラ傷をつけるなどの加工を施して接合する例は少ない。しかし、少数ではあるが以下のようない加工を加える例もある。

明官地廃寺では、丸瓦の凹面をイ、薄く削ったり、ロ、ヘラで沈線を数条加える例がある。イの場合はB面に丸瓦凹面を削った際に砂粒の移動などでついたごく細かい沈線が反転した凸線が、ロの場合には沈線が反転した凸線が残る（小澤1985、妹尾2005a）。安芸横見廃寺には図示できるその好例がある（第2図-6）。なお明官地廃寺では、e工程で外縁上半-丸瓦部分-と内区との境に生じた接合線に少量の粘土を足し指ナデする例がある（第2図-2・3）。

金寺山廃寺出土の軒丸瓦1類（第7図-8）には、丸瓦の凹面を薄く削り斜格子状にヘラ傷を加えて接合する例があり、また軒丸瓦4類（第7図-9）には丸瓦凹面を薄く削り端面に直交するヘラ傷を加え、B面にもおなじ方向のヘラ傷を加える例がある。

なお近江大宝寺廃寺例にはe工程で外縁に格子叩き目を加えるものがある（第6図-6、小笠原他1989）。



第2図 備後・安芸のS.R.技法の軒丸瓦

(1 神福寺廃寺、2・3・7~9 明官地廃寺、4 山王神社境内瓦窯、5・6 横見廃寺、10 正敷田廃寺、
縮尺1:4)

7 接合する丸瓦の硬さ

a 工程で范上にセットする丸瓦は少し乾燥したものが、作りたての軟らかいものか見極めることはむつかしい。しかし、B面には丸瓦凹面の布目压痕のボジ＝陽画が鮮明に残る例が多い（第1図6・7、第2図-6、第7図-5）。また明官地廃寺例のイ、丸瓦凹面を薄く削ったり、ロ、ヘラで加えた沈線の反転した痕跡が残っていること、外縁の重圧紋が下半のみに限されることから（第2図-2・3・8・9）、少し乾燥した丸瓦を用いた例が多いと推定できる。

一方、金寺山廃寺（第7図-8）や御用谷瓦窯・ケシ山瓦窯例（第1図-7）のように、外縁上半にも范を利用して重圧紋を施紋したものもあり、これなどはまだ紋様がつく程度の軟らかい丸瓦を使用したものと思われる。

中国雲南省の造瓦民俗例の観察（大脇2003）や実験によれば、できたての丸瓦円筒を2分割して使うことも不可能ではない。これなら施紋も可能だ。しかし、その多くは少し乾燥したものであったと思われる。

8 だまされないように

瓦当裏面に丸瓦を接着する普通の接合技法の中にも、丸瓦を深く接合した結果、瓦当面からわずか2～3mmを残して丸瓦が剥離した例があり、外見上1とおなじような割れ方を示す。また、范にまず薄く粘土をつめて丸瓦を接合し、厚く粘土を足して瓦当を作る場合も似た痕跡が生じる。

こうした例も多い。私も何回かだまされかけたことがあるが、1の剥離面や2の瓦当面側の接合線、3の痕跡、つまりA面やB面・C面が確実に作るか気をつける必要がある。また、小片では、いわゆる「嵌め込み技法」と呼ばれる瓦当内区部分の側面に丸瓦円筒を接合した例（第4図-1）との識別が難しいことにも注意したい。

さて、この技法は「丸瓦端をそのまま瓦当の周縁として、これに残りの部分を造りつける珍しい方法」（木村1985）とか、「丸瓦部の端面が瓦当上半部の周縁を形成する」（小澤1985）、「丸瓦を瓦当の上に深く被せることによって、その小口面が上半の周縁となっていた」（妹尾1994）、「丸瓦の端面が瓦当周縁の上半になる」（高・南2001）、「丸瓦先端が外縁上半を代替する」（佐川2004）、「丸瓦の広端を瓦当上半の外縁とする」（妹尾2005a）などと表現される特徴的なものである。

研究史をひもとくと、その存在は木村捷三郎・藤澤一夫の両「瓦博士」によって戦前から認知されていたようである。そして「深泥池瓦屋式」（木村1985）、「丸瓦被覆法」（妹尾2005a）、「半截丸瓦嵌め込み技法」（佐川2004、注4）、百濟では「公山城技法I」（戸田2004）などと名づけられている（注5）。

9 高岡技法と千房技法について

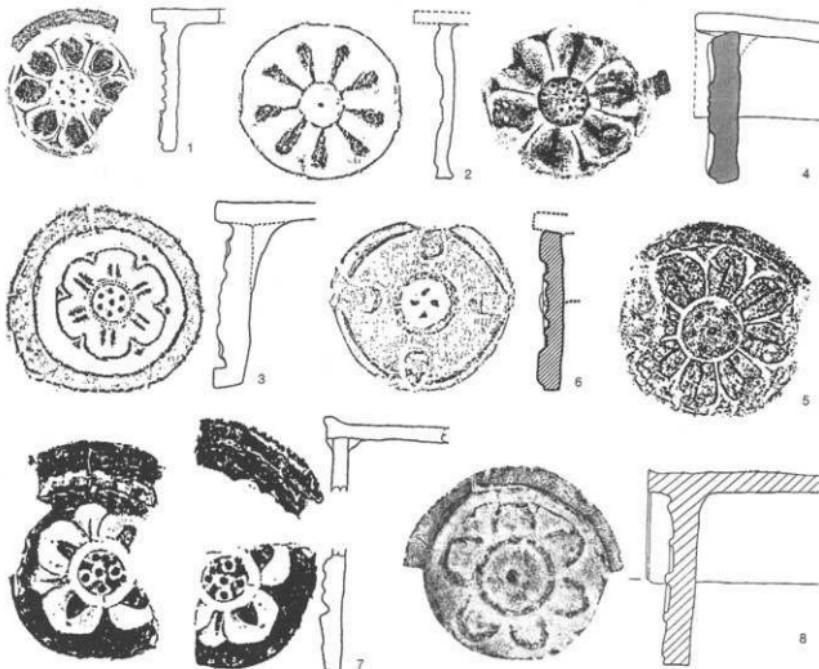
もうひとつ、わが国で高岡技法（第3図-8、高岡寺院1978）、半島のそれを千房技法（第3図-1・2、戸田2004）と呼ぶ例があるので、それについても紹介しておこう。

この技法は「深泥池瓦屋式」や「丸瓦被覆法」と工程はおなじであるが、下半の外縁用の粘土を最初からほとんど省略したり、削り取ったりするのを特色とする。武藏高岡廃寺や、韓国忠清南道保寧市帽山面にある新羅時代の千房遺跡（公州大1996）がその代表例である。また藤澤一夫先生によると百濟にも類例があるらしいが確認できない（梶川1987、討論の部、p195）。

一方、わが国では大宰府（第3図-4）や肥後の鞠智城跡（第3図-5、妹尾2005a、討論の部p124の栗原発言）、和泉塙穴寺廃寺（第7図-7、梶川1987、討論の部p195の藤澤発言、注6）、武藏御殿山窯址群（第3図-6）・同大寺廃寺（第3図-7）などに類例があり、そのひろがりの一端を知ることができる。ただし、なかには個体数のすべてが下半の外縁を持たないものばかりではなく、近江大供廃寺や大宝寺廃寺（第6図-1・5）、若狭興道寺廃寺（第6図-8）例のように、ごく少数にとどまる場合もあり、なお詳細な検討が必要である。

10 技法名の整理

ところで地名を冠した「高岡技法」や「千房技法」も、さきに紹介した「深泥池瓦屋式」や「公山城技法I」などとともに、わかりやすく覚えやすい。しかし、読者の間に混乱が生じることは避けられず、またこれをそのまま東アジア全域に及ぼすことは、日中韓相互、および英



第3図 SR-1 b 技法の軒丸瓦
(1～3 千房遺跡、4 大宰府、5 鞠智城、6 御殿山窯址群、7 大寺廃寺、8 高岡廃寺、縮尺1:4)

訳の必要性を考慮すると限界がある。もちろんこうした技法名も研究史上重要であり、必要に応じて使用することはさしつかえないが、誰かが軒丸瓦の製作技法の体系的な分類を試み、その系統的な発展過程を踏まえながら技法名を整理することが必要な時期にさしかかっているのではないだろうか。

またかえりみると、考古学の世界ではその学問としての成長過程を反映した「石包丁」など、不用意に使われた用語が定着した例が多い。材質の異なる木製や貝製のそれを木製や貝製石包丁と呼ぶのはおかしいといえばおかしい。それでも石包丁をいいかえると舌を噛みそうな「石製穂摘み具」ということになるので、なおその生命力を失わないが、軒丸瓦の「一本造り」や「嵌め込み技法」、「印籠接ぎ・印籠づけ」「芋づけ・べた付け・留付け」などの用語は濫用に誤用と拡大解釈が重なり、混迷の度を深めつつある。

11 軒丸瓦製作技法の系統樹

そこで、東アジアに広く分布する軒丸瓦の製作技法を俯瞰し、できるだけ全体像を見わたした上でその流れを整序し、最も適当な位置に置いて技法名や用語を考えることが必要となる。つまり、系統樹を作らなければならないのだ。ところが、これに真剣に取り組むためには、孫悟空からひと飛び10万8千里を行くという筋斗雲でも借りて東アジアを飛びまわり、良好かつ豊富な資料を詳細に観察する必要がある。さまざまな剥離面や破断面を有する破片と完形資料がそろわないとなかなか確実に技法や工程を復元することはできないからだが、それは無理だ。しかし、まず一步踏み出すことはできる。

今回出会った池田寺の軒丸瓦は、たった1点ではあるがこうした技法の復元にうってつけの資料である。これに今回収集した類例を総合すると、その最大の特色は、ごく普通の軒丸瓦の作り方が瓦当の裏面に丸瓦を接合する「瓦当裏面接合技法」であるのに対して、瓦当の側面に丸瓦を接合し、丸瓦がそのまま瓦当上半の外縁になる点にある。その意味では「丸瓦被覆法」(妹尾2005a) や、「半截丸瓦嵌め込み技法」(佐川2004) という用語も捨てがたいのであるが、軒丸瓦製作技法の系統樹を作るという観点からすれば、瓦当側面接合技法-S R 技法-と呼ぶのがふさわしいのではないかと思う。S R 技法のSはsideの、Rはround tileの略である。これは遺構番号のS AやS B・S Cにならったもので、A~ZとRの組み合わせをいろいろこじつけて使えば、26通りの技法をあらわせる。

12 S R 技法の細分

S R 技法もその工程の違いによって細分することができる。まず、この技法を丸瓦と瓦当用粘土のどちらを先に范に置くかで分けると、多数を占める丸瓦先置き式S R - 1 技法と、今のところ金寺山廃寺例などで確認できる瓦当先置き式S R - 2 技法に分類することができる。

さらに多数派であるS R - 1 技法も「深泥池瓦屋式」や「丸瓦被覆法」のように瓦当の内区と外縁の下半分を一体の粘土で作るS R - 1 a 技法と、「高岡技法」や「千房技法」によって代表されるS R - 1 b 技法に分けることができる。また明官地廃寺例のように、外縁下半を形

成する粘土紐をまず範に詰め、その上に瓦当内区部分の粘土を詰める技法は S R - 1 c 技法と呼ぶことができる（注7）。瓦当先置き式の S R - 2 技法が細分できるか否かは将来の課題である。

今後は、それぞれが S R - 1 a・b・c 技法、あるいは S R - 2 技法のどれに属すかを検討し、また丸瓦の加工など細部の手法の違いを明らかにして相互の関連をより鮮明につかむことが必要となろう。なお、本来は軒丸瓦製作技法の系統樹についても説明すべきであるが、紙数の関係上それは別稿にゆずり、今回は S R 技法の分布論について述べ、諸賢のご示教を賜りたいと思う。

13 S R 技法の分布論

分布論とは「ある種類の考古資料複数が、地理的空間にどのような水平的・垂直的位置関係をたもって存在するかを正しくとらえ、その分布から読みとれることを論じる」ことである（佐原1985）。この定義にしたがい、S R 技法の地名表（第1表）と分布図（第5図）を眺める以下のようなことがわかる。

S R 技法で作られた軒丸瓦は、西周～清までの中国の支配圏、これには朝鮮半島北部の楽浪郡や帶方郡、またインドシナ半島のベトナム北部に設置された交趾郡や九真郡も含むが（山形1999）、数少ない情報による限り今のところ見いだせない。さらに渤海や西夏など周辺の国々も今のところ空白・・・である。

一方、朝鮮半島では、百濟と新羅に多くの実例があるが、高句麗はごく普通の瓦当裏面接合技法といわゆる「嵌め込み技法」が知られているだけである。

そしてわが花綵列島では、今のところ大和での空白が際だつものの、畿内の山背・河内・攝津・和泉、また西では丹波・因幡・備中・備後・安芸・筑前・肥後、東では若狭・近江・能登・武藏・陸奥に広く分布する。以下、その垂直的分布、つまり年代論を紹介しつつ、水平的分布から読みとれる歴史的背景について少し考えることにしよう。

14 百濟

今のところ最も古く位置づけられるのは、都が熊津におかれた時代の遺跡が集中する公州市出土例である。

熊津時代 熊津には475年から538年まで都が置かれた。その王宮があったと見られる公山城（第4図-2・5・8）と艇止山遺跡、鳳凰洞遺跡（第4図-4）、西穴寺（第4図-6）、大通寺（第4図-3）、舟尾寺で6世紀前半に遡る S R 技法が確認されている（李2002、清水2003、戸田2004）。その瓦当紋様の多くは中国南朝の梁から伝えられたいわゆる南梁百濟様式である。

泗沘時代 次いで538年から660年の滅亡までの都であった泗沘、現在の扶余にある官北里遺跡・竈岩面外里遺跡、龍井里廃寺（第4図-7）・旧衙里廃寺（第4図-9）・軍守里廃寺（第4図-10、注8）・双北里遺跡・東南里廃寺・佳塔里廃寺・扶蘇山廃寺・錦城山廃寺・中井里廃寺・陵山里廃寺・金剛寺跡で6世紀中葉から後半にかけての例が多数発見されている（戸田2004、清水2005）。

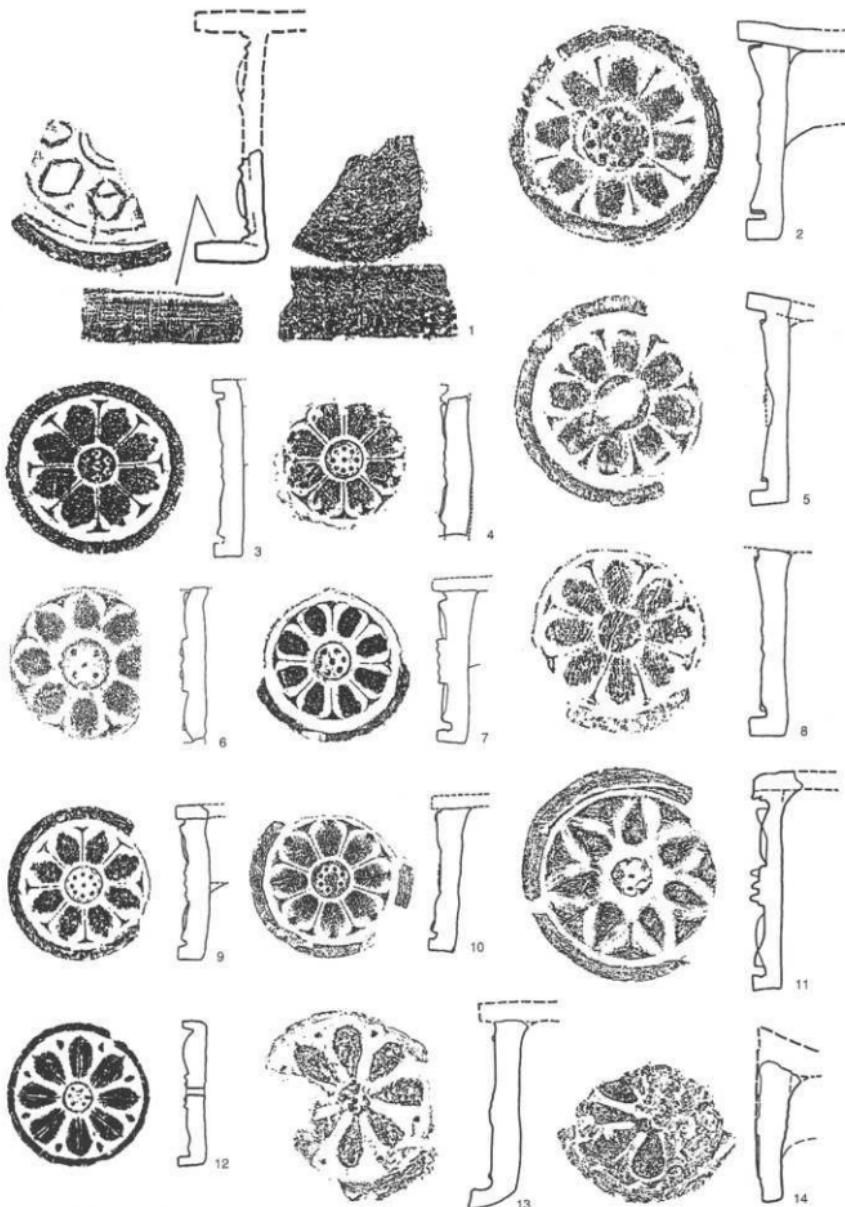
ところで、熊津時代に先行する漢城時代（～475年）に S R 技法が遡る可能性はないのでしょうか。漢城時代と熊津時代の屋瓦には断層があり、風納土城や夢村土城、あるいは石村洞4号墳からは楽浪や高句麗との結びつきが強い10型式ほどの軒丸瓦が発見されている（亀田1996、千田2002）。その中で、夢村土城出土の輪郭線で蓮華紋をあらわしたと思われる1例（第4図-1）だけが外縁内面に布目を残し、模骨巻作り丸瓦円筒を瓦当内区の側面に接合する丸瓦円筒嵌め込み技法と推定されている（亀田1996・1999）。しかし、それ以外は、粘土紐巻き上げ（泥条盤築）技法か、別に作った粘土紐巻き上げ作りの丸瓦円筒を瓦当裏面に接合する技法と考えられるものが多く、S R 技法は今のところ発見されていない。

今後もこうした状況が続くようであれば、S R 技法は熊津時代にその瓦当紋様とともに中国南朝から伝播したものか、独自発生したということになろう。南朝の瓦がなおブラックーポックスに近い状況での軽率な発言は慎まねばならないが、既知の南朝の軒丸瓦はその数が少ないとはいえすべて瓦当裏面に丸瓦を接合する技法のようである（井内2002・2004・2005）。そして中国全体を見渡しても特殊な接合技法をあまりみかけないという現状を考慮すると、現段階では後者の可能性が高いとせざるをえない。ここでは模骨巻作り丸瓦円筒を瓦当内区の側面に接合する漢城時代の技法の存在が引き金の役割を果たし、熊津時代に考案された可能性のほうが高いことを指摘し、大陸におけるさらなる調査研究の進展に期待することにしたい。

15 新羅

新羅におけるS R 技法はまだまとまった研究がなくその全貌がつかみにくい。しかし、いわゆる古新羅時代（～676年）を中心にかなり普及したことは確実である。最も古そうなのは、高句麗の蓮華紋軒丸瓦の影響を受けた月城跡出土の素弁8弁や9弁の蓮華紋軒丸瓦である（慶州博2000、p12 写真1、p13 写真2）。6世紀前半の年代が与えられているが、これに弁間に楔形の短い間弁を置き、弁央に凸線を飾る日本で「高句麗系」とされてきた9弁蓮華紋軒丸瓦や（慶州博2000、p17 写真13）、間弁の先端を三叉形にあらわし弁央に凸線を飾る9弁蓮華紋軒丸瓦（慶州博2000、p14 写真3）が続くのである。慶州ではこの他に皇龍寺跡の鬼面紋軒丸瓦（慶州博2000、p324 写真1059）や、三郎寺跡の有稜素弁8弁蓮華紋軒丸瓦（慶州博2000、p86 写真276）、天官寺跡の素弁8弁蓮華紋軒丸瓦（慶州2004）、靈廟寺跡の素弁8弁蓮華紋軒丸瓦（慶州博2000、p91 写真290・291）や慶州市内の仁旺洞遺跡例などがほぼ確実な例としてあげられる。

1998年に高句麗系蓮華紋軒丸瓦の影響を受けて成立した月城跡の軒丸瓦（慶州博2000、p12 写真1、p13 写真2）の接合技法を詳細に観察する機会があった（帝塚山大2000）。その時の観察メモによれば、S R 技法は、瓦当内区用の粘土をまず範に置き—その時粘土は外縁の内側までを覆う—、そのあと丸瓦を瓦当側面に添わせるように—この表現は（麥田2005）による—接合する技法（第4図-11）にやや先行する可能性が高いという印象を得た。これにもわかに結論はでないが、こうした流れといわゆる片ほぞ式接合技法との関係についても今後の検討課題としておきたい。



第4図 朝鮮半島出土のS R技法軒丸瓦と関連資料

(1 夢村土城、2・5・8 公山城、3 大通寺、4 凤凰洞遺跡、6 西穴寺、7 龍井里廃寺、9 旧衙里
廃寺、10 軍守里廃寺、11 月城、12 南京城内、13 清潭洞遺跡、14 宝文山城、縮尺1:4)

16 清潭洞遺跡例といわゆる「高句麗系軒丸瓦」について

その年代に諸説があるソウル市清潭洞遺跡例も S R 技法に属す可能性が指摘されており、その系譜や年代論の再検討が必要である（第4図-13、亀田1998・戸田2004）。本例は漢城時代の古風な丸瓦円筒嵌め込み技法からこの技法が生まれたという仮説の当否を考える材料となるものであるが、いまだ手にとって観察する機会に恵まれていない。ただし写真によるかぎり S R 技法である可能性は高い（公州博1988）。この遺跡からは百濟時代の土器の出土が伝えられているが、丸・平瓦は新羅時代以降のものだという（井内1982）。なお大田市宝文山城からは弁間に珠紋こそないが似た紋様の軒丸瓦が出土しており、その接合技法にも共通点があるという（第4図-14、亀田1998）。

ところで、こうした紋様はわが国のいわゆる「高句麗系軒丸瓦」のうち、山背の隼上り窓、飛鳥の豊浦寺・平吉遺跡・奥山廃寺、河内の渋川廃寺・船橋廃寺・衣縫廃寺・土師寺などで出土する弁間に珠紋を配し、弁端の丸い8弁蓮華紋軒丸瓦に類似点があり、その関係の有無や先後関係が議論されてきた（稻垣1981、亀田1994、上原2001）。

一方、中国ではこうした紋様は今まで知られておらず、それゆえに「高句麗系」とされてきたのであるが、最近、南京城内で南朝の都、建康時代のものと思われる垂木先瓦が発見され（第4図-12、井内2005）、また柳昌宗氏コレクション中の南朝の軒丸瓦にも類例があり（中央博2002、p210、写真315左下）、視野を南にも向ける必要を感じている。ただし、まだわが国の「高句麗系軒丸瓦」との隔たりは大きく、弁間に珠紋が短い楔形間弁であること、中房が低いこと、蓮弁の縦断面形を見るとその最高点が中央にあること、弁央の凸線が弁端からさらに延びること、など相違点のほうが多い。しかし、そこにむしろ今まで見逃されてきた祖型からの変化の過程が秘められていそうでもあり、南朝梁（502～557年）の短いくさび形間弁をもつ有軸素弁8弁蓮華紋軒丸瓦からしだいに変化した可能性を指摘しておきたい。そして、こうした色眼鏡をかけると、「高句麗系軒丸瓦」の指標のひとつとされてきた弁間に珠紋も、必ずしも高句麗の蓮華紋軒丸瓦につながるものではなさそうである。したがって「高句麗系軒丸瓦」そのものも、高句麗より南朝との関係を掘り起こす時期がきているのではないかと思われるが、こうした観点も含め、南朝屋瓦研究の進展を大いに期待したい。

さて、南京城内出土例の年代はにわかには決めがたいがひとまず梁末から陳（557～589年）、あるいは隋（581～619年）頃の年代が与えられるであろう。一方、清潭洞遺跡例の年代は南京城内出土例やわが国の「高句麗系軒丸瓦」に近い6世紀後半から7世紀前半である可能性が高い。ということで、少し回り道をしたが、結論としては、S R 技法は漢城時代の古めかしい技法の存在が引き金となって熊津時代に考案された可能性が高いことを再確認するとともに、その後、様々な瓦当紋様と結びつきながら百濟と新羅へ、そしてのち高句麗領となり、さらに新羅領となったソウル市周辺へ伝えられた可能性を想定して後考をまとう。

17 そして列島へ

列島には S R - 2 技法を含め29の確実な例があり、またその可能性が高い例もいくつか存在

する。小論を契機に検討が進み、技術伝播の道筋や工人の移動と交流の実態が明らかになればと思う。以下、地名表や分布図に盛り込めなかった考えるためのヒントや課題、図表の作成段階に気づいた感想を列記しておく。もちろん、分布図に「多くのみせかけ」があることは、すでに論じられているとおり（佐原1985）。少数例から分布論を論じるこわさは十分承知した上で将来の展開を予測するにつぎのようになる。

図を作りながら気づいた大きな特徴のひとつに、分布の疎密がある。大和の空白については先述したとおりだが、資料の蓄積を考慮すると、これがみせかけである可能性は低い。もし発見されてもそれはあくまでもごく少数にとどまるであろう。一方、河内と摂津・和泉にはかなりのまとまりがあり、それは若狭・近江・山背からほぼ一直線に連なる「連続的伝播」になりそうな予感すら抱かせる。そして近江における分布も今のところ湖西に限られ、湖東地域に及ばない点が注目される。

こうした分布の空白に対しても、その背景を考えるべきであろう。大和郡山市額田寺や天理市平等坊・岩室遺跡のいわゆる古新羅系の有稜素弁6弁蓮華紋軒丸瓦も瓦当裏面丸瓦接合技法である（上原2001）。湖東に多い、いわゆる湖東式軒丸瓦の接合技法も同様である。

大和の空白は興味深い課題である。飛鳥寺の屋瓦を生産した花組と星組の中にS R技法は含まれていなかった。また、それ以外のいわゆる「高句麗系」や新羅系とされる軒丸瓦にも一切S R技法は含まれておらず、大和ではあくまでも瓦当裏面丸瓦接合技法の枠内での試行錯誤にとどまるのである。そして、排他的な技術と工人の交流が形成され、やや遅れて渡来した古めかしいS R技法を保持する工人は大和には入れなかつたのではないか。

一方、まとまった分布圏を形成し、かつ技術伝播の実態を考える上で見のがせないのは安芸から備後にかけての4遺跡である。ここでは飛鳥や斑鳩からもたらされた范や瓦当紋様を含みながら、接合技法は大和とは異なるという興味深い現象が明らかにされている（山崎1983、妹尾1994）。

この現象を解く鍵は、神福寺廃寺（第2図-1）や明官地廃寺出土の04型式（第2図-2・3）が握っているのではないかと思う。両者はその顔つきこそ異なるが、どちらも弁央に稜をもつ素弁6弁軒丸瓦である。前者は半島における系譜を追いかがたいが、安芸寺町廃寺や近江の衣川廃寺・大供廃寺（第6図-1）、陸奥腰浜廃寺例によく似た例があり、おそらく半島のどこかに祖型が求められるのである。また後者は、月城例（慶州博2000、p18、写真19）や、百濟系を称する渡来系氏族の氏寺である和泉信太寺に類例がある（和泉市1979、大阪府1982、注9）。ここでは慶州周辺からこうした瓦当文様とともにS R技法を伝えた工人が、畿内から持ち込まれた瓦当范や紋様を用い、横見廃寺や明官地廃寺の子葉のまわりに「火焰紋」をあらわす山田寺式軒丸瓦や一連の軒丸瓦を製作した可能性を指摘しておきたい。

もうひとつ注目すべき地域として、大供廃寺と大宝寺廃寺が位置する琵琶湖西岸北部をあげることができる。大供廃寺とその瓦窯では5型式ある軒丸瓦のうち2型式が確実にS R-1 b技法、ないしはS R-1 a技法で作られている（第6図-1・3・4）。また大宝寺廃寺でも軒丸瓦5型式のうち、4型式（第6図-2・5・6・7）がS R-1 a技法ないしはS R-1 b技



第5図 S R 技法軒丸瓦の分布図

番号	遺跡名	所在地	図の番号	技法	年代	文献
1	大宰府跡	福岡県太宰府市大宰府	第3図-4	S R - 2	7世紀後半	九州歴2000 栗原2001
2	鞠智城跡	熊本県鹿本郡菊鹿町	第3図-5	※	※	小田1993 奈文研2005
3	明宮地廃寺	広島県高田郡吉田町中馬	第2図-2・3・ 7~9	S R - 1	※	妹尾2005a
4	正敷田廃寺	タタタ向原町長田	第2図-10	※	※	※
5	横見廃寺	豊田郡本郷町下北方	第2図-5・6	※	※	※
6	神福寺廃寺	庄原市宮内町隠地	第2図-1	※	※	※
7	関戸廃寺	岡山県笠岡市関戸	第7図-9	※	※	※
8	寺内廃寺	鳥取県気高郡鹿野町寺内	第6図-9・11	※	※	関西大1981 上田1987
9	波尼窯跡	兵庫県氷上郡柏原町下小倉	第6図-13	※	7世紀末~ 8世紀前半	氷上郡1997
10	興道寺廃寺	福井県三方郡美浜町興道寺	第6図-8	※	7世紀末	北陸1987 美浜町2006
11	大供廃寺	滋賀県高島郡今津町大供	第6図-1・3・4	S R - 1 S R - 2	7世紀後半	小笠原他1989
12	大宝寺廃寺	タタ新旭町熊野	第6図-2・5・ 6・7	※	※	※
13	ケシ山窯跡	京都市北区上賀茂ケシ山町		S R - 1	※	木村1985 梶川1987
14	御用谷窯跡	タタタタ	第1図-6・7	※	※	※
15	九頭神廃寺	大阪府枚方市牧野本町	第7図-3・4	※	※	竹原他2006
16	金寺山廃寺	豊中市本町	第7図-8	※	※	藤沢1961 豊中市2004
17	安堂寺廃寺	タタ大阪市中央区安堂寺町	第7図-5・6	※	※	大阪市1981 宮本1999
18	船橋廃寺	タタ柏原市古町・藤井寺市 北條町	第7図-1	※	7世紀中葉	梶考博1999
19	塩穴寺廃寺	堺市石津北町檜木山	第7図-7	S R - 2	7世紀後半	梶川1987 石田1936
20	堺市内某寺	タタ内出土	第7図-11	S R - 1	11世紀	小谷城郷土館 1997
21	池田寺跡	和泉市池田下町中村	第1図-2・4	※	7世紀後半	上田2000
22	国分廃寺	石川県七尾市国分町		※	※	北陸1987
23	千野遺跡	タタ千野	第6図-10	※	※	※
24	御殿山窯址群	東京都八王子市鱒水	第3図-6	S R - 2	10世紀後半	八王子1981
25	高岡廃寺	埼玉県日高市清流	第3図-8	※	9世紀後半	高岡1978 酒井1982
26	大寺廃寺	タタ山根下大寺	第3図-7	※	9世紀中葉~ 後半	酒井2002
27	原田瓦窯	福島県郡山市大槻町阿良久	第6図-14	S R - 1	8世紀末~ 9世紀前半	國土館大1984
28	腰浜廃寺	タタ福島市腰浜町	第6図-12	※	9世紀中葉	佐川2004
29	黒木田遺跡	タタ相馬市中野明神前	第6図-15	※	7世紀末	相馬市1977

第1表 S R 技法軒丸瓦の地名表

法で作られており、02型式（第6図-6）は大供廃寺例と同范である可能性が高い。これらのうち、大供廃寺の弁央に稜線をもつ素弁8弁蓮華紋軒丸瓦01型式（第6図-1）が安芸神福寺廃寺例とともに古式の紋様をもつことはすでに述べたとおりである。

さて、こうした視角からS R技法で作られた各地の瓦当紋様を一瞥すると、埴穴寺廃寺（第7図-7）や関戸廃寺出土の山田寺式（第7図-10）、あるいは堺市内出土例（第7図-11、注10）のように明らかに新しそうな例を除くと、神福寺廃寺（第2図-1）や明官地廃寺（第2図-2）、大供廃寺（第6図-1）や船橋廃寺（第7図-1）、九頭神廃寺（第7図-3・4）・大宰府（第3図-4）・鞠智城（第3図-5）・寺内廃寺（第6図-9・11）・波尼窓跡（第6図-13）・大寺廃寺（第3図-7）・高岡廃寺（第3図-8）、中房に旋回花紋をめぐらす三蕊四葉紋軒丸瓦という特異な紋様をもつ腰浜廃寺（第6図-12）のそれが、やはり半島系の色彩をわめて濃い瓦当紋様であることに気づく。

九頭神廃寺のいわゆる雷紋縁複弁蓮華紋軒丸瓦（第7図-3・4）は、和泉の和泉寺例（第7図-2、竹原他2006）や近江園城寺例（小笠原他1989）とともに、列島内で独自の展開をみせる雷紋縁の中でも最古のグループに属す。半島には、こうした「蓮弁紋縁」と呼ぶべき一群にそっくりな文様構成こそ見いだせないが、その源流が統一新羅にあることは衆目の一致するところであろう。

また能登国分廃寺や千野遺跡の複弁蓮華紋軒丸瓦（第6図-10）も、その中房に6弁の花紋が飾られているが、これも新羅に多い紋様である。

一方、大供廃寺（第6図-4）や大宝寺廃寺（第6図-6・7）、興道寺廃寺（第6図-8）・寺内廃寺（第6図-9・11）の10弁や12弁蓮華紋軒丸瓦は、その紋様が単純なだけにただちに新羅の瓦当紋様に粗型を求めるることはできない。しかし、各寺院の地理的環境に留意し、また寺内廃寺ではほぼ同時期のものと認められるI類D型式に忍冬唐草紋をめぐらすことによると、これまた新羅との関連が無視できない存在となる。また安堂寺廃寺出土の单弁蓮華紋軒丸瓦（第7図-5・6、注11）や金寺山廃寺出土の10弁の山田寺式軒丸瓦（第7図-8）も、いわゆる山田寺式軒丸瓦とは一線を画して理解すべきものである。

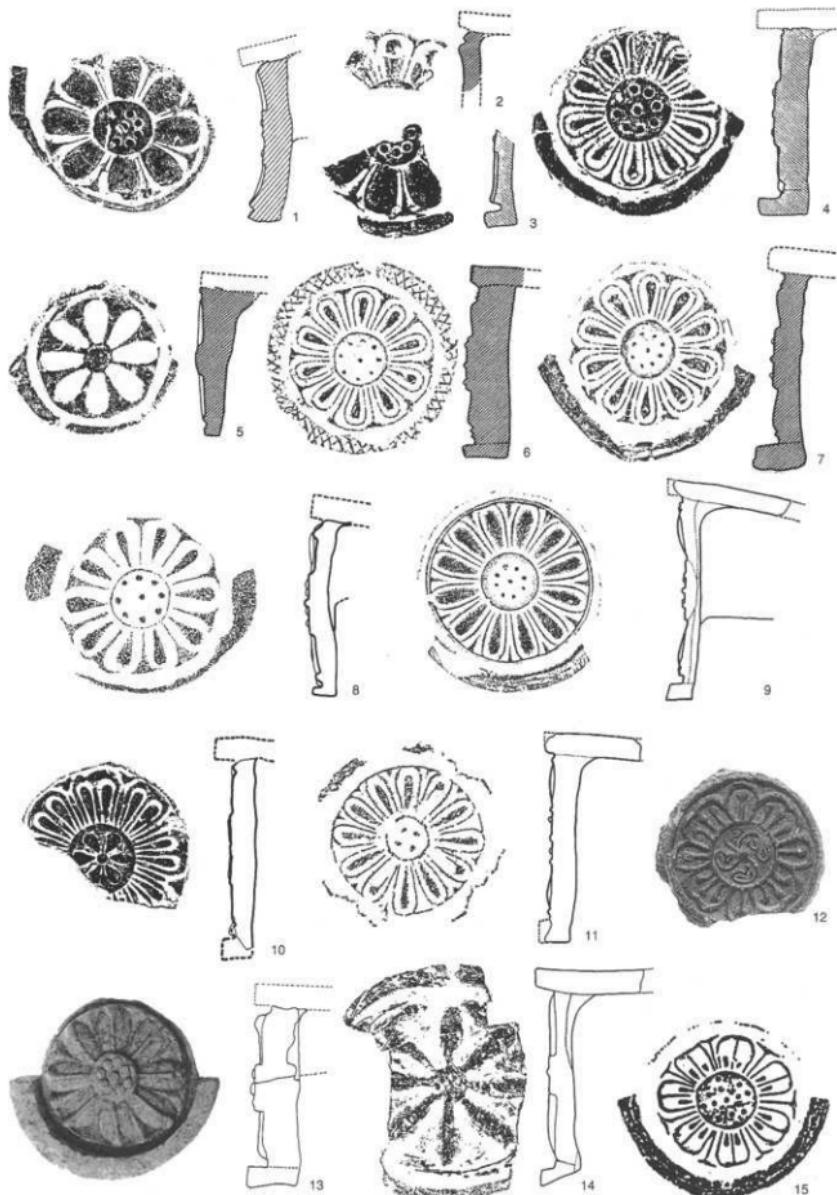
列島のS R技法の故地は新羅にあるのであろうか。とすれば、それはいつ頃のことなのであろうか。

船橋廃寺例（第7図-1）は、小片ではあるが他の破片と総合すると嵌め込み技法ではなくS R技法である可能性が高い（樋考博1999、特別展の際の観察による）。弁央に凸線をもつこの種の瓦当紋様はこれまで「高句麗系」とされ、7世紀前半代の所産と考えられてきたが、古新羅との関係も無視すべきではない。

神福寺廃寺や明官地廃寺例は古段階の山田寺式軒丸瓦と共に伴しており、7世紀後半でも早い段階の年代が与えられる。大供廃寺例の年代は決めがたいが、重弧紋軒平瓦が伴うのであればこれも7世紀後半ということになる。その他の例も7世紀後半に属するものが多く、その盛行年代がその頃にあることは一目瞭然である。

一方、その終焉はいつ頃になるのであろうか。

畿内とその周辺では堺市内出土例だけが11世紀と新しい。東国では、8世紀末から9世紀初



第6図 各地出土のS-R技法軒丸瓦

(1 大供磨寺瓦窯、2・5・6・7 大宝寺磨寺、3・4 大供磨寺、8 興道寺磨寺、9・11 寺内磨寺、
10 千野遺跡、12 腰浜磨寺、13 波尼窯跡、14 原田瓦窯、15 黒木田遺跡、縮尺1:4)

めにかけての原田瓦窯例、9世紀中葉の腰浜廃寺例・高岡廃寺例、9世紀後半の大寺廃寺例と続き、10世紀後半の御殿山窯址群例がもともと新しい。これらのなかには大寺廃寺や腰浜廃寺例のように半島から直接もたらされたと思われる紋様もいくつか見かけられ、その年代が動かないとすれば、9世紀まで新たな渡来があったことになる。

18 東アジアの地中海－日本海・東海－

佐原真氏は「分布論を展開するにあたっての基礎的問題」を論じた際に、分布論には「安心な分布論」と「不安な分布論」があるとした。こうした観点からS R技法の分布論を点検すると、安定した分布論にはほど遠いと言わざるを得ない。今後、軒丸瓦の製作技法に関する関心が今以上に高まり「眞の空白」が明らかにされればと思う。それが実現すれば、逆にこの技法の伝播の経路をより鮮明に辿りうるはずだからである。

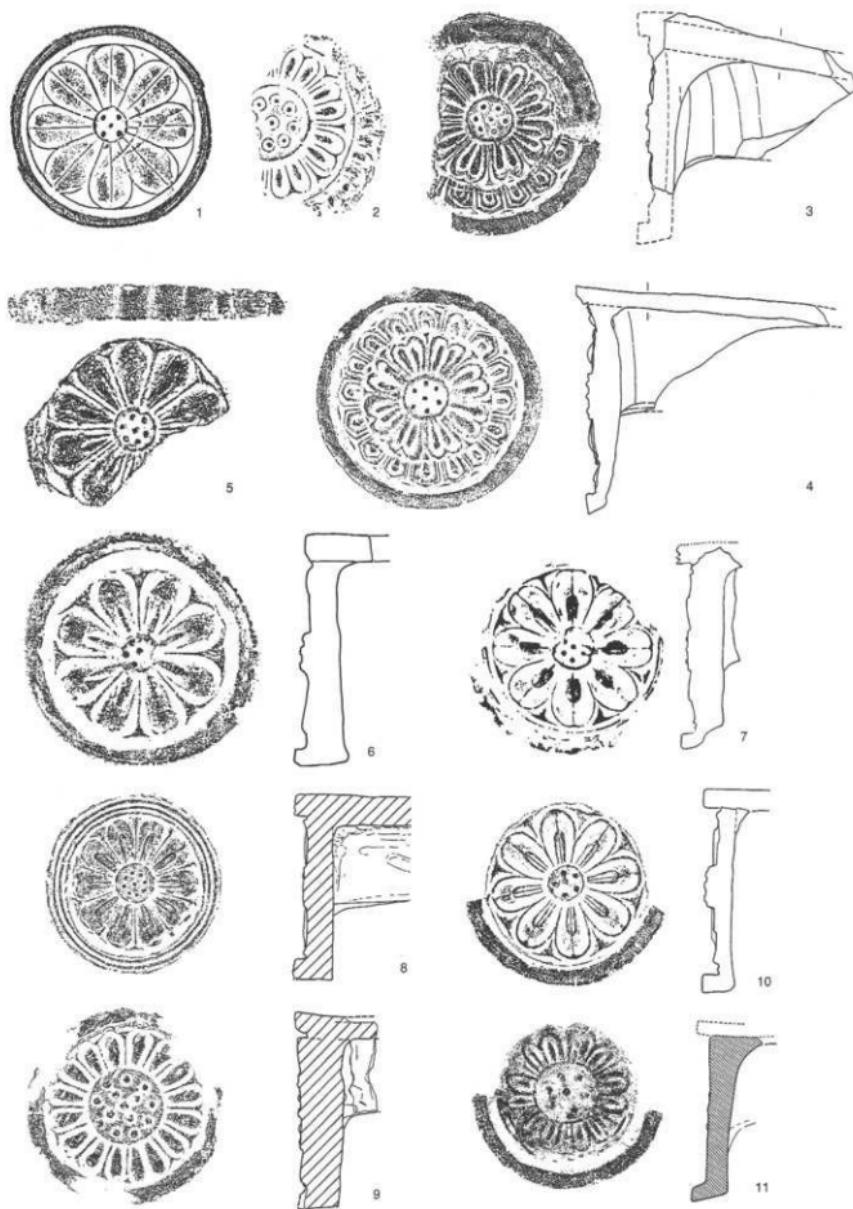
こうした不安な分布論ではあるが、大胆に予測すると、大勢は半島からの伝播説に有利とせざるをえない。また瓦当紋様という属性を重視すると、その経路もどこか一箇所に伝播してから各地に伝わった「簪形」とするより、複数の地点に「さみだれ式」に渡来したという図式を想定するほうがよさそうである。いわゆる丸瓦円筒嵌め込み技法や「一本造り技法」などとともに何回かにわたって伝えられたのであろう。

一方、列島における独自発生の可能性はどうか。とくに年代的にも空間的にも孤立した例については、こうした観点からの検討が必要ではあるが、瓦当紋様との結びつきはいずれも半島の影響が強く、その可能性は低い。

そして、この小論のきっかけとなった池田寺出土の軒丸瓦は、畿内に到達した彼らが辿った道筋のひとつを示す可能性が高い。I B a型式は弁央に凸線を置く古新羅特有の蓮華紋である。したがって、池田寺式軒丸瓦を山田寺式亞式と考える従来の見方は再考が必要となろう。I B a型式の弁央の凸線を省略したものが池田寺式軒丸瓦である可能性のほうが高いからである。

池田寺は皇別池田朝臣の氏寺とされているが、その造瓦には新羅系工人の関与があったものと思われる。この寺の第2期の造営に用いられた外縁に忍冬唐草紋を飾る素弁8弁蓮華紋軒丸瓦（第1図-5、池田寺II型式）も、平城宮や京内出土の6345 A型式や6346 A型式・6348 A a・A c型式の系譜に連なるものではなく、より濃厚な新羅の影響を感じ取ることができる。池田寺I B a・I B b型式-7世紀後半-と、II型式-8世紀前半-は接合技法も異なり、その年代も數十年のひらきがある。したがって、池田寺には2度にわたり新羅からの工人の渡来や影響がおよんだものと思われる。

S R技法や様々な瓦当紋様を伝えた工人の多くは、東アジアの地中海－日本海・東海－を小舟で渡り、列島の沿岸各地に到達した新羅を中心とする半島人であったと思われる。列島の屋瓦に新羅の影響が色濃いことは、すでに多くの先駆者が説くとおりである（船垣1981、森1990）。もっとも、660年の百済、668年の高句麗の滅亡後は半島全体が新羅領となるので、これ以降に伝えられたものはすべて新羅系ということになるが、百済や高句麗の残影がそれぞれの地域に残ったことは疑いなく、中にはかつての百済領の出身者や、列島から半島へ渡った人物も含ま



第7図 各地出土のS R技法軒丸瓦と関連資料
 (1 船橋廃寺、2 和泉寺、3・4 九頭神廃寺、5・6 安堂寺廃寺、7 塩穴寺廃寺、8・9 金寺山廃寺、
 10 関戸廃寺、11 堺市内某寺、縮尺1:4)

れていた可能性も考慮すべきであろう。

いうまでもないことではあるが、半島と列島は「一衣帶水」の関係にあり続け、人々の往来が絶えることはなかったのである。

19 おわりに－歴史は繰り返す－

東アジアの瓦作りを型利用という側面から眺めると、土器とおなじように100%手作りの段階から、プレス機械による100%型作りの段階へ「進化」したということになる。

西周から秦漢代にかけての粘土紐巻き上げ〈泥条盤築〉技法で作られた軒丸瓦は、水分の含有量を同じくする－逆にいえば乾燥の度合いを等しくする－一体の粘土＝共土から瓦当と丸瓦を連続して作った。これを一体連続成形技法と呼ぼう。瓦当部と丸瓦部の接合はいうまでもなく強固である。しかし、范以外には型を使わないので、丸瓦部の径や長さを揃えるためには熟練を要する。はじめは簡単なものさしの類を使ったのであろうが、やがて工人の手が規格を覚え、型の代わりを果たすまでの習熟期間を必要とした。

そうした時代から、量産のために瓦当と丸瓦の成形を分業し、乾燥の度合いが異なる両者を接合する接合成形技法に移行した。そして、その瞬間から接合面で剥離しやすいという宿命的な欠陥が軒丸瓦につきまとうことになった。

量産をとるか強度をとるかという矛盾の中で、接合成形技法の弱点をなんとか克服しようとして、このS R技法や「嵌め込み技法」「一本作り技法」など、あれこれ工夫した瓦工達の姿をそこ見ることができる。そして、結果的にはこのS R技法は欠陥の多い技法として見捨てられることになったのであるが、畿内や東国では時々思い出したように9世紀から11世紀にかけて再生した（注12）。

こうした格闘が始まったのは、壮大な宮殿や陵墓の建設が相次いだ秦の始皇帝の時代にさかのぼり、その後、急速に進んだ。そしてその後も巨大プロジェクトが各地で展開される度に、さまざまな技法が考案され、消えてはまた復活した。歴史は繰り返すのである。その結果、複雑な枝振りを呈することになった軒丸瓦の系統樹については稿を改めることとし、ひとつの軒丸瓦との出会いから生まれた「一瓦一會」の縁に因むS R技法の生い立ちと、その展開についての話をひとまず終えることにしたい。

【注】

（注1） 観察できた資料によれば、I B a型式とI B b型式は彫り直しの関係にあるのではなく明らかに別の范と思われ、その型式番号も変更の必要がある。なおI B a型式とI B b型式にはS R技法のものがあるが、I A型式やI C型式の接合技法はごく普通の瓦当裏面に丸瓦を接合する例が多いようである。

（注2） こうした丸瓦側面の圧痕は、范にまず薄く粘土をつめて紋様部を作つて丸瓦を接合し、そのあとで厚く粘土を足す作り方でも似た痕跡が生じるので区別する必要がある。

（注3） 金寺山廃寺については、新免廃寺や金寺という名称も用いられてきたが金寺山廃寺と呼ぶこ

とにした。

(注4) 半截丸瓦という用語が丸瓦をさらに半截したという誤解を生む可能性もあり、丸瓦凹筒嵌め込み技法－いわゆる嵌め込み技法－、丸瓦嵌め込み技法、というほうが妥当か。

(注5) 韓国ではこの他に扶余陵山里寺址出土軒丸瓦の接合技法のC 2 技法（扶余博2000）、慶州天官寺址出土軒丸瓦の接合技法のI型式（慶州2004）という分類も用いられている。

(注6) 石田茂作氏以来塙穴寺という名称が用いられてきたが、この名称が古代までさかのぼるという根拠はないので塙穴寺庵寺と呼ぶのが適当と考える。なおこの寺から出土した山田寺式軒丸瓦－西琳寺式軒丸瓦－には、3重弧紋軒平瓦の中央の弧線に×形－あるいは4弁花紋か－をあらわした4頭の刺突紋を連続して押すものが伴うようである。これについては、近江を中心に分布する「湖東式軒丸瓦」に共伴する波状重弧紋軒平瓦、なかでも山背美濃山廃寺例などとの関連がうかがわれ、これまたその背景に半島からの影響を認めることができるかもしれない。

(注7) 近江大供廃寺のように、同范でも S R - 1 a 技法（第6図-3）と S R - 1 b 技法（第6図-1）の両者が認められる場合があり、そのちがいは外縁下半までを覆う粘土を用いるか否かにすぎない場合もある。また一遺跡出土の軒丸瓦がすべて S R - 1 a 技法や S R - 1 b 技法で作られていることを確認できる例も少なく、韓国千房遺跡例でも第3図-3のように S R - 1 a 技法で作られたものも多い。明官地廃寺例も S R - 1 c 技法で作られたものは古式の紋様をもつ例（第2図-2・3・7）に限られ、やや新しい紋様をもつもの（第2図-8・9）は S R - 1 a 技法によるものが多い。

(注8) 丸瓦凹面を削り、斜め方向のヘラ傷を加えて接合する例がある。

(注9) 信太寺創建時の軒丸瓦と目される I A 型式は、これまで軽寺式軒丸瓦の延長線上での理解が一般的であり、筆者もそうした見解にしたがったことがある（大脇2005）。しかし、こうした先入観を捨ててすなおに観察すると、軽寺式より新羅の月城跡出土例（慶州博2000、p18、写真19）との類縁が強いことを確認できる。

(注10) 近藤康司氏のご教示によると堺市大野寺と深井清水町A遺跡に同范例があるというので、そのどちらかで採集されたものであろう。

(注11) 安堂寺廃寺は、従来難波宮下層遺跡とか安曇寺跡（上田2000）と呼ばれてきた。安曇寺跡である可能性も高いが、現状では地名を冠して安堂寺廃寺と呼ぶのが適切である。

(注12) すでに述べたように S R 技法はいわゆる「嵌め込み技法」や丸瓦を深く接合した例との識別が難しいが、今後の検討によって類例が増加しそうな地域として北陸と関東から東北の地域をあげておこう。この地域にはいわゆる「一本作り技法」や「嵌め込み技法」などの特殊な接合法で作られた軒丸瓦の分布も多く、S R 技法が将来増加する可能性が高い。

【参考文献】（韓国・日本、発表順）

国立公州博物館 1988『百濟瓦當特別展』

公州大学校博物館 1996『保寧ダム水没地域発掘調査報告1 千房遺跡』

国立慶州博物館 2000『新羅瓦塚』

国立扶余博物館 2000『陵寺』

- 国立中央博物館 2002『柳昌宗寄贈瓦碑』
- 国立慶州文化財研究所 2004『學術研究叢書38 慶州天官寺址發掘調査報告書』
- 石田茂作 1936「墳穴寺」「飛鳥時代寺院址の研究」聖德太子奉賛会
- 藤澤一夫 1941「摂河泉出土古瓦の研究－編年的様式分類の一試企－」『考古学評論』3
- 藤澤一夫 1961「古墳と氏寺－宮山古墳群と金寺山魔寺－」『農中市史』第1卷
- 木村捷三郎 1969「平安中期の瓦についての私見」「延喜天曆時代の研究」古代学協会編 吉川弘文館のち『造瓦と考古学 木村捷三郎先生頌寿記念論集』1976 真陽社に再録
- 井内潔 1976「楽浪郡時代の標式的造瓦技法」「井内古文化研究室報16」
- 井内功 1977「楽浪郡時代の造瓦に関する覚書」「井内古文化研究室報18」
- 相馬市教育委員会 1977「黒木田遺跡」
- 藤貞速・関口広次訳 1978「百濟蓮華紋瓦当編年に関する研究」「古文化談叢」第4集 九州古文化研究会
- 高岡寺院跡発掘調査会 1978「高岡寺院跡発掘調査報告書」
- 和泉市教育委員会 1979「信太寺址発掘調査概報－和泉市上代町所在－」
- 埴塙晋也 1981「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅の要素」「新羅と日本古代文化」
- 大阪市文化財協会 1981「第85次発掘調査概報」「難波宮跡研究調査年報」1975～1979.6
- 関西大学文学部考古学研究室 1981「寺内廐寺発掘調査概報3」鹿野町教育委員会
- 八王子バイパス鍾水遺跡調査会 1981「南多摩窯址群 御殿山地区62号窯址発掘調査報告書」
- 井内功 1982「ソウル特別市清潭洞遺跡と出土古瓦について」「古代瓦研究論誌」井内古文化研究室
- 大阪府教育委員会 1982「觀音寺遺跡発掘調査報告書」
- 酒井清治 1982「瓦の製作技法について」「埼玉県古代寺院跡調査報告書」埼玉県県史編さん室
- 山崎信二 1983「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集
- 国士館大学文学部考古学研究室 1984「針生・原田瓦窯跡」「考古学研究室発掘調査報告書」甲種第3冊
- 小澤毅 1985「瓦類」「明官地廐寺跡試掘調査概要」吉田町教育委員会
- 木村捷三郎 1985「ケシ山窯跡群発掘調査概要報告」京都市埋蔵文化財調査センター
- 佐原眞 1985「分布論」「岩波講座 日本考古学1」岩波書店
- 上田睦 1987「因幡寺内廐寺について－主に軒丸瓦製作技法からみた寺内廐寺の変遷－」「関西大学考古学研究紀要」5
- 梶川敏夫 1987「ケシ山窯跡群」「歴史考古学を考える－古代瓦の生産と流通－1」帝塚山考古学研究所
- 広島県立埋蔵文化財センター 1987「明官地廐寺跡－第1次発掘調査概報－」
- 北陸古瓦研究会 1987「北陸の古代寺院－その源流と古瓦－」桂書房
- 小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通 1989「近江の古代寺院」真陽社
- 森郁夫 1990「瓦当文様に見る古新羅の要素」「畿内と東国の瓦」京都国立博物館
- 小田富士雄 1993「熊本県・鞠智城跡をめぐる諸問題」「潮見浩先生追憶記念論文集」
- 龜田修一 1994「瓦から見た畿内と朝鮮半島」「ヤマト王権と交流の諸相」古代王権と交流5 名著出版

- 妹尾周三 1994 「横見庵寺式軒丸瓦の検討－いわゆる「火焔文」軒丸瓦の分布とその背景－」『古代 第97号 特集 古代における同範・同系軒先瓦の展開』早稲田大学考古学会
- 龜田修一 1996 「百濟漢城時代の瓦と城」『第2回百濟史定立のための学術セミナー 第1部 百濟の建国と漢城時代』百濟文化開発研究院
- 京都市埋蔵文化財研究所 1996 「木村捷三郎収集瓦図録」
- 小谷城郷土館 1997 「和泉古瓦譜・増補版」
- 近藤康司 1997 「和泉における古代寺院の成立と展開」『攝河泉古代寺院論纂』1 摄河泉古代寺院研究会・攝河泉文庫
- 水上郡教育委員会 1997 「波尼遺跡」『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書』I
- 龜田修一 1998 「百濟・新羅の高句麗系軒丸瓦－日本のいわゆる高句麗系軒丸瓦との関係を中心に－」『飛鳥時代の瓦作り2』古代瓦研究会 のち『古代瓦研究1－飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで－』奈良文化財研究所2000に収録
- 龜田修一 1999 「武藏の朝鮮系瓦と渡来人」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』同刊行会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999 「蓮華百相－瓦からみた初期寺院の成立と展開－」(p59、船橋庵寺9)
- 宮本佐知子 1999 「出土瓦から見た難波京から大坂築城まで」『大阪市文化財研究紀要』第2号
- 山形眞理子 1999 「ベトナム中部の国家形成期遺跡」『季刊考古学』66 雄山閣出版
- 上田睦 2000 「攝河泉の山田寺式軒丸瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり4－山田寺式軒丸瓦の成立と展開(1)－』古代瓦研究会 のち『古代瓦研究2－山田寺式軒丸瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所2005に収録
- 金鍾萬、鄭桂玉訳 2000 「扶余陵山里寺址出土瓦当文様の形式と年代観」『帝塚山大学考古学研究所研究報告2』
- 九州歴史資料館 2000 「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」
- 帝塚山大学考古学研究所 2000 「大韓民国への瓦調査旅行」『帝塚山大学考古学研究所研究報告2』
- 上原真人 2001 「額田寺出土瓦の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告 第88集』
- 栗原和彦 2001 「大宰府出土瓦に見られる朝鮮半島統一新羅時代文化の影響」『九州歴史資料館研究論集26』
- 高正龍・南孝雄 2001 「高麗美術館所蔵の朝鮮古瓦について」『高麗美術館館報52』
- 井内潔 2002 「中国南朝屋瓦の変遷」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』同刊行会 真陽社
- 酒井清治 2002 「瓦生産と寺院跡」『古代関東の須恵器と瓦』同成社
- 李タウン 2002 「百濟の瓦生産－熊津時代・泗沘時代を中心として－」『韓半島考古学論叢』すざわ書店
- 千田剛道 2002 「高句麗および百濟の都城と瓦」『奈良文化財研究所紀要2002』
- 大脇潔 2003 「雲南甕紀行II 聞き取り調査の結果と若干の考察－雲南の土と牛と「弓」と－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告5』
- 清水昭博 2003 「百濟「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開－中国南朝系造瓦技術の伝播－」『百濟研究』

38 忠南大学校百濟研究所

井内潔 2004 「「蕭倅墓開址」にみる二、三の課題」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 6』

佐川正敏 2004 「福島県原町市泉庵寺跡出土軒瓦が語る古代行方郡衙郡寺の様相」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第36号

戸田有二 2004 「百濟の鏡瓦製作技法について 2 -熊津・泗沘時代における公山城技法・西穴寺・千房技法の鏡瓦-」『百濟研究』40 忠南大学校百濟研究所

豊中市教育委員会 2004 「金寺山庵寺 - 第1・2・3次発掘調査報告書 - 」

井内潔 2005 「中国・六朝時代の屋瓦六題」『帝塚山大学考古学研究所研究報告 7』

大脇潔 2005 「発掘された古代寺院 - 信太寺跡 - 」『てら・ひと・かわら - 瓦から探る和泉の古代寺院展 - 』和泉市いづみの国歴史館

清水昭博 2005 「軍守里庵寺出土軒丸瓦の検討」『MUSEUM』596 東京国立博物館

妹尾周三 2005a 「安芸の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究 2 - 山田寺式軒瓦の成立と展開 - 』古代瓦研究会シンポジウム記録 奈良文化財研究所

妹尾周三 2005b 「備中の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究 2 - 山田寺式軒瓦の成立と展開 - 』古代瓦研究会シンポジウム記録 奈良文化財研究所

菱田哲郎 2005 「山背の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究 2 - 山田寺式軒瓦の成立と展開 - 』古代瓦研究会シンポジウム記録 奈良文化財研究所

奥村宏美 2006 「和泉地域の軒瓦と古代寺院」『古代和泉郡の歴史的展開』和泉市史紀要第11集 和泉市史編さん委員会

竹原伸仁・近藤康司・上田睦 2006 「揖河泉の雷文縁・重圓文縁の複弁蓮華文軒丸瓦」『第9回古代瓦研究会シンポジウム 飛鳥白鳳の瓦づくり 9 -雷文縁・幅線文縁・重圓文縁の複弁蓮華文軒丸瓦の展開 - 』奈良文化財研究所

美浜町教育委員会 2006 「歴史シンポジウム 興道寺庵寺の謎に迫る -古代若狭のテラとムラー- 」

【図版出典】

掲載した軒丸瓦の拓本と実測図は、それぞれの報告書や参考とした論文から複写し、縮尺およそ4分の1に統一して作成した。ただし、第2図-1は、妹尾周三氏のご好意で送っていただいた拓本と実測図を複写・トレースしたものである。

【後記】

本稿をまとめるにあたり、金誠亀・金有植・尹根一・天野卓哉・網仲也・井内潔・市本芳三・乾哲也・井口喜晴・岩戸晶子・上田睦・上原真人・上村和直・大橋泰夫・小澤毅・梶山勝・龜田修一・橋田正徳・高正龍・栗原和彦・近藤康司・佐川正敏・清水昭博・白石耕治・真保昌弘・妹尾周三・高井暉・竹原伸仁・田中早苗・千田剛道・戸田有二・花谷浩・松下正司・松葉危司・宮本佐知子・森郁夫・八木久栄・山崎信二・山路直充・吉澤悟の各氏にご教示をいただき、また資料の観察や文献の複写などで大変お世話になりました。文末ではありますが記して感謝の意を表します。



1



1



2



2



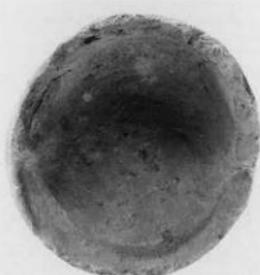
3



3



4



4



5



5



6



6



7



7



8



8



9



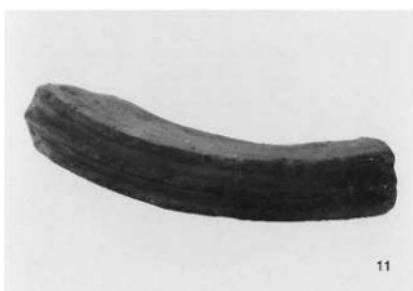
9



10



10



11



11



12



12



13



13



14



14



15



15



16



16





21



21



22



22



23



23



24



24





29



29



30



30



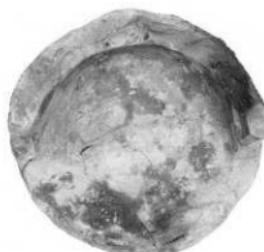
31



31



32



32



33



33



34



34



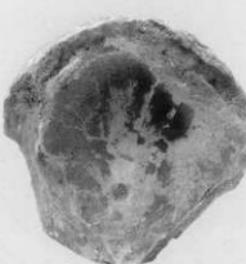
35



35



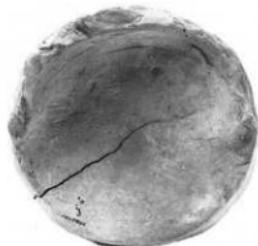
36



36



37



37



38



38



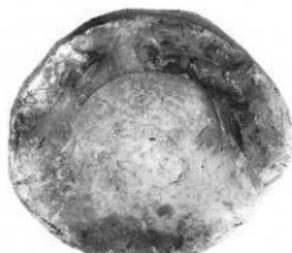
39



39



40



40





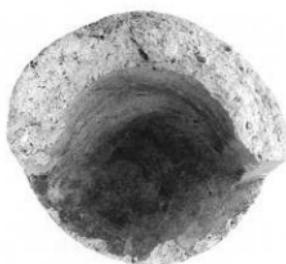
45



45



46



46



47



47



48



48



49



49



50



50



51



51



52



52



53



53



54



54



55



55



56



56



57



57



58



58



59



59



60



60



61



61



62



62



63



63



64



64

三毛雄一氏・前鳥取小学校・東京取公民館委員会報告書

2002年

元 仁政市教育委員会生涯学習部
生 活 学 習 推 動 部
大阪府茨木市旭町35の1

